やまさき文化

'93-2＊No.12

山崎町文化協会

〝やまさき文化第十二号〟発刊に当たって

山崎町文化協会会長　壺阪　壽

「やまさき文化」も第十二号を発刊することになりましたことは、山崎町の文化活動の向上のためにもまことに慶ばしいことであります。

そして同時に御投稿下さいます方々や、それを編集して下さいます委員の皆様にもその御労苦に対して心より感謝申し上げます。

山崎町文化協会には二十一団体が加入されていて、それぞれの団体が大変熱心に色々な文化活動をされています。「やまさき文化」にはその様子が掲載されていて、どの団体がどんな活動をしておられるのがよく分かります。

西播磨文化協会にも各市町の協会が加盟されていますが、それぞれの協会が文化誌を刊行されています。それを拝見致しますと、各市町でも色々な文化活動をされている一端を窺うことが出来ます。一度西播磨でもそれを持ちよって研修会を開いて、内容の向上充実を図ったらという意見も出ています。

私は旅行が好きなものですから、時々国内でもあちこち旅行します。高度経済成長前後迄は、どこに行っても画一化されてゆくように思えて、それぞれの町の特色が無くなってゆくように感じたのですが、最近では、その町の持っているものを創り出そう、或は、育てていこうといった傾向が出てきているように感ぜられます。

〝やまさき文化〟が今後更に、回を重ねられる毎に山崎文化活動の先駆的役割を担ってゆかれることを切望して止みません。

◇目　次◇

やまさき文化第十二号発刊に当たって　壺阪　壽　2
刑屍剖観　浅田　耕三　3
サルに魅せられて　松岡　史朗　13
曲る石の話　清水大吉郎　14
短　歌　藤原　すみ　15
俳　句　和田　疎人　17
〃　永井とみ代　18
『西播磨ふれあい文化交流会』に寄せて　松本　敏和　19
山崎文化会館前にふるさとの歌碑を建立　藤村　清一　20
さつき祭　小池　忠雄　20
城崎、天の橋立旅行　中川　春郎　21
今昔にみる謡　伊野　操治　21
子供と将棋　三宅　宏佳　22
文化事業に積極的に参加　池田　尚治　22
野の花によせて　梢崎　好江　23
ご存じですか　柳田　弘　23
旧山崎小学校校歌　小川　登　24
日中国交正常化　二十周年の思い出　24
踊りを楽しみボランティア活動　西川　慶子　24
蒔絵教室　加藤　一子　25
心のふれあい　松尾　豊子　25
平成四年合唱連盟だより　藤井　七代　26
尺八雑感　石野　和雄　26
囲碁の素晴らしさを次の世代に　松本　明　27
事務局便り　長川　耕一　28
編集後記　荒木　俊介　28
表紙画／カット／　柳田　勝
表紙題字　尾崎　正一

刑屍剖観

浅田耕三

「野犬でも食ったのであろう」
いや、と横川新左衛門はかぶりを振った。
「野犬でも狼でも、ひと一人の亡骸を悉皆喰ろうたりはしますまい。骨ぐらいは残すでしょう」
「うむ、だが、近頃は野犬も増えておるからのう。飢えたやつが血の匂いに八頭十頭と集まってきて骨諸共食い尽くしたのではないか」
「犬の足跡など一つもなかったそうです」
「自分でたしかめたのか、源四郎は」
「徒士二人を伴なって今朝方、大畑の河原に出向いて調べたと報告して参りました」
「ほう、では首なしの骸がほんとに忽然と消えたというのじゃな」
「その通りです」
ふむ、小西靱負は小鬢をかしげた。
須行名村大畑の揖保川原で、盗賊日頭の藤兵衛を斬首の刑に処したのは、四日前、宝暦十年八月十一日の未の刻（午後二時）であった。
首打ち役は馬廻り役勝田六郎太、見事に打ち落とした首は河原の砂中三尺の深さに埋めさせた、と靱負はあとで検視役の新左衛門から報告を受けていた。
死罪人の骸は昔から埋葬せぬしきたりで、藩の「御仕置御条目」でも遺棄するよう定められている。この定めは近隣他藩でも同様である。
だから死罪の執行は人のあまり近寄らぬ広い河原や山の深い谷間をえらぶ。
しかし落とした首までうち棄てておくのは罪人といえどもさすがに不憫な気がして新左衛門は近くに埋めさせたという。
骸の方は荒蓆にくるんでお定め通り、半町程離れた所へ雑役がひきずっていき、草の中へ放置した。

「まさか、遁走した手下が戻ってきて持ちさったのではあるまいのう」
靱負の言葉に新左衛門が苦笑した。
「あの手下共にさような殊勝さはござらん。それに――」
「うむ、首ならばともかく、骸など持っていかぬか――」
靱負も嗤った。
斬首にした日頭の藤兵衛は六尺近い大男であった。首なしといえども骸を運び去るのは容易でなかろう。
藤兵衛が手下四人を連れて領内能倉村の油屋喜兵衛方へ押入り、手代一人を惨殺して黄金八十五両を奪い逃走したのは先月末の二十八日夜分。主人夫婦を脅して金の在り処を吐かせ、大金を盗み取ったのだが、ちょうど他出していた乙吉という二十六歳の手代が賊のいるまに戻ってきて、これが血気さかんで気転もきく若者だったのがよくなかった。
賊に気付かれぬよう奥の納戸から持ち出した刀を抜いていきなり大声で脅しておき、急を番屋にしらせに駆けだした。賊が二人、凄い勢いで追ってきてうしろから肩口へ袈裟がけに斬りつけた。乙吉は多少剣の心得があったらしいが、まさしく生兵法ゆえに、落とした命であった。
表高一万石の播州安志藩領四十六カ村は、山間部ながら因幡街道の、わりに交通の要衝に位置していて、そのせいか、残念ながらこうした凶悪事件がまま発生する。だから藩庁でも領内の治安には一番意を注いでいるのだが――。
物頭格の伊部源四郎は、配下の横目、徒士を督励し、全力を挙げて盗賊の探索にあたった。その結果、五人はまだ近くに潜んで次の獲物を狙っているらしいという情報をつかんだ。
この情報把握が功を奏した。
百姓姿に身をやつし、ひそかに野田村の大百姓杉田三郎兵衛の木屋に潜んでいた源四郎とその配下三人は、油屋喜兵衛方を襲った十一日後に、野放図にも再び須行名村に押し入った藤兵衛を、見事に取り押さえたのである。
須行名村は先月末に襲った能倉村とは僅か一里足らず。しかも源四郎以下が身を潜めていた野田村とはつい目と鼻である。源四郎の指図で互いに警戒し合っていた近所の百姓がひそかに杉田家へしらせに飛んだ。
急報を受けた源四郎一行は直ちに駆けつけ、抵抗する手下二人を斬り殺し、頭の藤

兵衛を捕えた。二人は遁走した。
八十五両の銭の在り処はしかし吐かずじまいで藤兵衛は斬られた。
根っからの悪人で首の座に直っても口辺に薄嗤いをうかべていたという。
彼の骸がないとわかったのは偶然で、藤兵衛を遺棄した雑役の一人が、腰に挿していた莨入れをそのあたりで紛失したのに気がつき、相棒に頼んで二人で翌々日捜しに行ってみた。一人では気味が悪かったのであろう。
莨入れはあったが骸がなかった。
あれから大雨でも降っていたのなら川が氾濫して骸が流されたと納得もできるが、生憎四日間は秋晴れの好天気続き。
川原に棄てた遺体が一つ消えたぐらい、放っておけばよいようなものだが、面妖な事はどうも気になるもので、ひょっとしたら新たな犯罪と結びついているのではあるまいかと、靱負は落着かなかった。
翌日彼が御用部屋にいると、伊部源四郎が入ってきた。
「ご中老殿にご報告申し上げる」
連子窓を通して入ってくる明るい陽射しが源四郎の顎の張った四角い顔を照らしていた。三十代半ばの働き盛りだ。
「藤兵衛を処刑した翌日の十二日、刑場付近に三人の人影がうろついていた事がわかりました。田の稗抜きに出た百姓が見かけておりました」
「ほう、三人。百姓か」
「いえ、それが遠目のためまだ何者ともわかりません。けれど聞きこみを続ければ、必ず見当がつきましょう」
大畑の河原は、幅十五、六間の流れの向こうに屏風を立てたように西の山が迫り、東は一面の稲田。北から南へ流れる川はこのあたりで、白く累々たる石の磧を大きく包み込むように、ゆるやかに西から東へ迂回し、荒涼とした、石と青草ばかりの風景を描き出している。
人の丈に近い草の中を三つの人影が動いていたとしても、たしかに何者ともわからぬだろう。
三人の正体をつかんだのは、それから三日後。
一人の横目が、十二日の昏れ方、能倉で開業している医者の松村芳寛が、妻女と下男を連れて因幡街道を北へ歩いていた、と聞きこんできて源四郎に報告した。
源四郎がふと聞きとがめたのは三人の風体である。下男の吉次郎は大きな荷物を背負っていたという。芳寛も皮袋のようなものを肩にし、妻女がうしろに随っていたが、これは風呂敷包みをかかえていた。
往診にしては大げさな荷物であるし、第一、患家へ行くのに妻女を同行する筈がない。
源四郎はまず吉次郎にあたってみた。彼は下男とはいいながら医術見習の書生である。
「どうじゃ、往診や遊山などではあるまい。何をしにどこへ行っていた」
四半刻ばかり鋭く問い詰めると吉次郎はやがてしどろもどろになり、ぽつんと先生のお供で大畑へ、とこたえた。
「そこで何をしていた」
しかしその問には、顔の蒼白い、背のひょろりとした若者が口を貝のように閉じて一言もこたえず、時々躯をおこりのように痙攣させた。何か余程のことがある、源四郎はすぐにぴんときた。彼からしらせを受けた目付の横川新左衛門は、芳寛を陣屋へ呼んで訊き糺すことにし、靱負の配下の裁可を受けにきた。裁可を受けるのは、松村芳寛が先代以来、典医の中に名を連ねていたからである。尤も、ここ数年江戸在住が殆んどの藩主小笠原長逵のお脈をとった事は、若い芳寛は一度もないのだが――。
松村芳寛――、その名を新左衛門から聞いた時、靱負ははっとした。三年前の記憶がよみがえったのだ。
「新左衛門、これはちょっと厄介な事になるかもしれぬぞ」
「はあ」、新左衛門は怪訝な目で靱負をみつめた。
「厄介な事とは？」
うむ、靱負は言葉を濁した。知っているのは自分だけである。話すべきか、とも思ったが取り調べの前に予備知識を与えるのはどうか、と思い直した。
「いや何でもない。何でもないが、お白州にはひとつ、わしも同席させてもらえぬか」
「ご中老が同席、ですか」
ちょっと驚いたように靱負を見たがすぐに、
「よろしゅうござる。ではご印形を」
靱負は判を押した。取り調べは明後日辰の刻である。

領内佐用郡西本郷村の娘が浮世の子を生んだ。浮世の子とは、若者の婚いによって未婚の女が孕んで生んだ子である。

子供は娘の二親が育てたが年頃になると背のすらりとした細面の評判の美人になった。周りからちやほやされて言い寄る男があとを絶たず、そんな事から人柄も悪くなっていたのであろう。一たんは祖父母の決めた男の所へ嫁いだが、町の小間物屋の手代といつかよい仲になってしまい、ひどい女で無惨にも共謀して夫を毒殺してしまった。それが露見して手代は逸早く逃亡したが女はつかまった。

磔刑に決まったが、この時靱負の元へ来たのが医者の松村芳寛で、彼は手をついてこんな事を申し出た。

「何とぞご威光をもちまして磔刑を打首に変改されその遺骸を手前共にお下げ渡し下されませ」

名目上は典医とはいえ、実質は芳寛は一介の町医者である。それが藩の決めた仕置きを変更してほしいという非常識さにも靱負は驚いたが、その理由を聞いていよいよ唖然とした。

「死骸を何とする」

「医術の進歩に役立てます」

靱負は意味がわからず、どういう事かと重ねてきくと、芳寛は一言こたえた。

靱負は、この男気が狂っているのだ、と思った。背筋に悪感がはしり、むろん一言のもとにはねつけた。が、相手はいろいろ理屈を並べて容易にひき下がらない。大声で怒鳴りつけてやっと追い返した。追い返したあとも靱負は後味が悪く、思い出すたび鳥肌が立った。

彼は松村芳寛という男を調べてみた。

松村家は、享保元年（一七一六）、小笠原家が播州安志に入封する以前からの、代々の医家であった。

芳寛は十八歳で京都に上り医術を学んでいたが、宝暦二年、父の病気により帰国して家業を継いだ。同時に山崎藩領の町医者渋谷弘道の娘千代を妻に迎えている。

女や子供にはあまり人気がないが、家業はわりに繁昌しているらしい。特に外科の腕の評判がよく、遠くは備前や作州、南但あたりからも診察を乞いにくる患者があるという。

お白州と呼ぶ安志藩陣屋の取り調べ所は、西曲輪の亥の口門を入った脇にあった。籬のこっちに七、八坪の庭があり、庭に面した式台の奥に長四畳の板の間、その上に十畳の畳敷の部屋がある。裁かれる者は、百姓町人の場合はこの庭にひき据えられ、士分の者は板敷に控えさせられた。

奉行は目付の横川新左衛門で、側に書物役が二人、長机で記帳する。靱負は畳の間の隅にひかえて取り調べの一部始終を聴くことにした。

苗字帯刀の芳寛は徒士二人に案内されて板敷へ坐った。

型通りの姓名、年齢、居住地等の尋問のあと、何用あって十二日、大畑の河原へ参ったかと奉行が訊いた。芳寛はこたえない。新左衛門が重ねてゆっくりした口調で尋ねると、長い間沈黙していた芳寛が不意に言葉を発した。

「無断ながら、罪人の遺骸を調べさせて頂きました」

靱負はぎくんと思わず躯が前へ揺れた。

——やはり——。

頸から背へかけて何かで刺されたような痛みが走った。

新左衛門は、初めて聞いた時の靱負と同じく、芳寛の言葉の意味がわからなかったらしい。

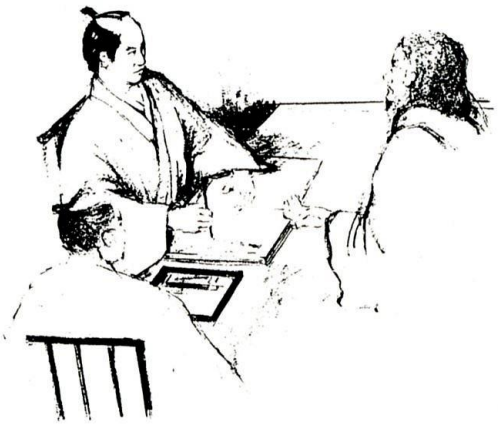
「調べさせて頂いたとはどういう事か」

「刀でもって内部を開き、躯の器官、臓物の実見をいたしました」

庭にひかえた小役人、雑役達の間に一斉にどよめきが起きた。

新左衛門は茫然と、板の間に居直った如く胸を反らして坐した医家の、眉太い、精悍な顔をただまじまじと見つめるばかり、右膝に立てた扇子を握る拳が小刻みに顫えている。

「ま一度申せ。罪人の躯を、何



としたと」
暫くして、漸く気をとり直したらしい彼の、奇妙に甲高い声がお白州一ぱいに響いた。
「医術の研究進歩のために、あの死骸の中味を実見実測させて頂きました」
「あの河原で、か」
「さようでございます」
「死人の躯の中をどうやって見た、と申す」
「ですから刀で切り裂いて中を……」
「さ、さような事は、宥されてはおらぬ。たとえ罪人とは申せ、死ねば仏――であろう」
その語尾が急に弱くなった。
――ならばその仏を河原に打棄てて野犬に食いあらさせたり、腐敗にまかせる藩のやり方は――。
詰問しながら新左衛門はそう自問したのかも知れない。
「宥されてはおりませぬが、それで百人二百人の人の命が救われるかも知れませぬ。人の躯の構造など何一つわからぬ医者では、治る病も治せません」
「では死人の躯を開けば生きた病人は治せるのか」
「はい、躯のしくみ、働きがわかれば治療法は今よりも格段に進みます」
「じゃから法を犯してあの罪人の躯を切り開いたと申すのじゃな」
「わが同門の若狭の医家、原松奄、小杉玄適、伊藤友信の三名はすでに六年も前の宝暦四年二月京都所司代酒井忠用様に願い出て、京都六角獄舎で斬首刑となった男の屍体をもらい受け、これの腑分けをいたしております」
「――――」
「かねがね同じ願望を持っておられたわが師山脇東洋先生もこの三名に招かれ、僅か四半刻（半時間）ばかりではありましたが人の体内を観察して絵図にとられ、昨年『蔵志』という書物二巻、総紙数八十二枚のものを刊行なされました」
「ふわけ、とは？」
「海外では腑分け、解体、解屍などと称し支那の古医書『霊枢』には解剖と記され、古くからある研究方法ですが、この国で行なったのは京都が初めてです」
「うむ、しかしそれは酒井様の許しを得た上であろう。わが藩では、罪人の骸を解体してよいなどという、許しは与えておらぬ。其の方は禁令を犯し、世人を愕かした事この上ない。罪は厳しく問わねばならぬ」
「畏れ入ります。願い出ても宥されませぬし、かと申していつまでも手を拱いているのが辛抱できず、止むに止まれぬ思いで……」
「併せて尋ねる。其の方の妻女千代と下男吉次郎も大畑へ同道したそうじゃが、両名ともそれに立合うたのじゃな」
「さようでございます」
「その腑分けとやらを手伝わさせたのか」
「はい」
まわりから声とも呻きともつかぬものがまた起こった。
「吉次郎はともかく、千代は女じゃ。女の身がそのように血まみれの作業をまこと、手伝うたと申すか」
医者にしては陽に灼けて逞しい芳寛の顔から白い歯がこぼれた。
「妻は医者の娘に生まれ私に嫁ぎ、そして今は私の一番の助手でもあります。いつも私の傍にいて傷の手当など手伝うておる人間が、血をおそれていては仕事になりませぬ。それに妻は、人の体内の器官もわからずに、病人の治療にあたっている私の普段のいらだちを、最もよく理解しており、三年前に罪人の屍体のお下げ渡しを小西様まで願い出たのも、この妻の思いつきでした」
新左衛門が靱負の顔を見た。靱負は頷いてみせた。
「私共夫婦、いやおそらく大部分の医家の胸の中には人間の躯の内を知りたいという願いが火のように燃えているのです。東洋先生はお若い頃、腑分けがとても望めないため、獺の体が人間に酷似しておると師の後藤艮山先生から聴き、何度も獺の解剖をなさいました。けれど獺と人間では明らかに違いがある事がわかったのです――」
新左衛門は何思ったか、そこで芳寛の陳述を手で押さえ、休憩を宣した。再開は午後である。
靱負は新左衛門と一緒に昼食を摂った。昼食の弁当を食べながら三年前の芳寛の願い出が事実であったかどうか、新左衛門は靱負にあらためて問うた。靱負は頷いた。
新左衛門は靱負の意見もきいた上で、使いを松村芳寛の屋敷へ走らせた。
午後は未の刻（二時）に取り調べを再開したが、あらためて召喚した芳寛の妻千代

と下男を縁側にひかえさせた。
当日、吉次郎の背負っていた風呂敷包みも芳寛夫妻の持っていた道具類もすべて押収し、お白州に運ばせていた。午後のお白州は横目付一人、雑役一人、記録は午前中通り二人、それに新左衛門と靱負の二人で、あとは立合いから外した。
事件の特殊なことを配慮したのである。立合った者には厳重に箝口令もしいた。
雑役の手でまず開かれたのは、吉次郎の背負っていた風呂敷包みである。中から出たのは衣類であった。
縁側にひろげられたそれを、靱負は息をつめて覗き込んだ。
当日、三人の着ていたものだが、血や汚物であろうか、黒や灰色のよごれがしみつき、異臭が鼻をついた。作業の終わったあと、河原で携帯してきた衣服と着替えたと芳寛が説明した。
「どうして焼かなかったのだ」
眉をひそめて新左衛門が訊いた。
「焼く？勿体ないことを。洗えば汚れはきれいに落ちます」
芳寛がいうと「私が洗うつもりでしたが、二、三日主人の手伝いに忙しくついそのままにいたしておりました」
そうこたえた千代の顔を靱負はまじまじとみつめた。
二十七歳、色白面長で目元の凛とした、顔も躯も小づくりの女である。このか細い肩の女が、ほんとにこれ程異様な、浅ましい作業を手伝ったのだろうかと、靱負はそれが不思議でならない。
芳寛が皮帯で肩から提げていた皮袋の中の函には、刃渡り八寸ばかりの無反りの短刀やら鋭利な小柄が二本、長い釘の先端を平たくして刃にしたものが二本、鋏に大小のやっとこ、刃渡りの小さな鎌と竹箸などが入っていた。
千代がかかえていた包みには、五、六枚の紙に器官の絵図が描かれ、文字が記されている。肺、心、脾、肝、腎の五臓に大腸、小腸、胃、胆、三焦、膀胱の六腑、それが所々に黒いしみや汚れた指のあともついて、それだけでその場の凄惨な様子がうかんでくる。
新左衛門は三人の名をかわるがわる指しては訊問する。吉次郎は怯えて何度も口ごもったが、芳寛は落着いてはきはきこたえた。
記帳方が筆を走らせる。靱負はじっと耳を傾けた。
大畑の河原へ三人が着いたのは四ツ（午前十時）頃であった。
死体の場所はすぐにわかった。ごろごろした磧石の間にはびこった蓬の上に、夜露に濡れた蓆巻きが丸太ん棒のように転がっていた。
吉次郎が腰に挿した鎌で縄を切り、蓆を解いた。首の斬り口から噴き上げた血が、藤兵衛の大名縞の単衣を腰のあたりまで染めていた。血は黒味を帯びていたがまだ乾いてはいない。
芳寛と吉次郎の二人で蓆の端を持って二間程離れた、草のない砂地に運んだ。
吉次郎がぷつりと兵児帯を断ち下帯の紐を切った。芳寛が手を掴んで上体を少し起こし、吉次郎が衣類を剥ぐ。遺体は棒のように硬直していたから鎌と鋏で布を裂きながら裸にした。
皮膚は粉でもまぶしたように白くふやけていた。芳寛が仰向けにした遺体の腹部を跨ぎ首の斬り口に小脇差の切先を入れて、胸から腹へ真直ぐに下ろしかけたが、こつんと銷骨にあたって止まった。
芳寛は晒木綿を刃のなかばに巻いて握り、刃を手前へ寝かせるように斜めにして力をこめて下へひいた。こつこつと刃先が胸骨にふれながら胸の肉が開かれ、肋骨の中の臓器が見えた。刀を棄て竹箸を使って芳寛はていねいに気管を見、肺臓の大きさをまず指で測り次に尺を当て、その奥の食道も挟んで形や色をたしかめ、太さや長さも調べた。肋骨を数え、上程細くなった筍状の背骨の構造も調べた。
芳寛の頭の中には、山脇東洋が「蔵志」の中に描いている四葉の図が灼きつけられている。その最初の一枚、「剥胸腹図」と、目の前の、自らの手で今開いたものとを比べてみた。左右の肋骨は図の如く九枚あり、次の「九臓前面図」に描かれた気道、食道も図の通りで、「気道在前食道隠後」という説明も肯かれた。
が、目のあたりにする臓器と墨で描いたそれらの絵図とは、これは全く別物であった。夢中で千代にもたせた紙に写し取る。落着け落着け、懸命に自身にそう言いきかせても息はひとりでに弾み、ごくんと生唾をのみ込む。
「心の臓は両の掌を丸めて合わせた程もあり、たくさんの管がついていて桧皮の色のように赤く濁っておりましたが、所々に白みがかった薄桃色の部分が残っていて、きっと生きていた時は、このようにあたたかいきれいな色で全身に血を送り、動いていたのであろうと、そう思うと何やら胸が熱うなって、筆を持った指も思うようには動いてくれません。眼はかすんで拭うてもぼんやりしてくるし、こんな事じゃいかんと思

うて竹筒の水を飲んで気分を落着けました」

「その『蔵志』とやらに描かれているのとはそれ程違うていたか」

靱負はついひき込まれて横から尋ねた。

「はい。しかしそれは東洋先生がまちがっておられるわけではありません。絵図四枚は、やはり東洋先生門下で絵の達者な浅沼佐盈という伊勢山田原の人の描いたもので、図としてはなかなかのものですが、しかしあれ程見事で複雑な人間の内臓を絵に写し取るなどは、到底できるものではありません。墨で写し取るには人間の内臓はあまりに複雑巧緻で色あざやかで、そして何とも逞しいものでした」

芳寛の目がキラキラ光る。靱負は無意識に深く頷いていた。

「私は落着いてくるにつれ、何やら神様を目の前にしているような、ひどく慎ましい、厳かな気分になりました」

縁側では千代と吉次郎が凝然と坐し、新左衛門も詰問を忘れたように黙している。

「それに山脇先生の実見には曖昧な点、不足の部分も無論ありました。と申しますのは、京都の六角獄舎での『蔵志』の観察は、専ら雑役の手で、彼の持った刀で切り開かれるのを、先生達は傍で眺められたもの、先生がご自身の手で納得ゆくまでたしかめられたものでなく、それは獄舎の役人が許さなかったのです。何しろ時間は僅か四半刻、それまでッと停止を命ぜられたのですから仕方なかったのでしょう」

芳寛の念頭には、もはやお白州で訊問を受けている事情などきれいに拭われているのであろう。膝をのり出し、憑かれたように身ぶりまでまじえて話す。

「腹部の方はどうであったの」

靱負は奇妙に訊きたい衝動にかられて再び口を挟んだ。

「腹部も同じでした。いや、もっと、まるで子供の頃のように私は胸がときめきました」

芳寛は靱負を見据えて身をのり出す。

「東洋先生のお手元にはベスリンと申す西洋人の書いた解体書があり、私も何度か見せて頂きました。むろん文字などはわかりませんが、絵図だけ見ましても古医方の説く五臓六腑とは大きな隔たりがありました。これはどうもベスリンの方が正しいようだと先生もかねがねいわれ、その疑問を六角獄舎で解こうとなさったわけです。結果は先生の推察通りでした」

芳寛は二、三度頭を左右に振るような仕草をして居住まいを正した。

「私は残念ながら、そのわが国最初の解体には参加できず、ただ先生からおくられた『蔵志』のみを読んだのですが、それ以来、どうしても人の躯を自分の目でたしかめたいと思ったのです。藤兵衛という盗賊には気の毒ながら、私のこの願いはようやく叶えられました。あの男は実に堂々とした、立派な内臓を持っておりました」

六角獄舎では時間がなく、東洋は小腸と大腸の区別ができなかったが、芳寛は、小腸の先端にまさしく大腸のあることをたしかめ、直腸から肛門にいたっているのも目のあたりにした。胃、胆のう、肝臓、腎臓の位置、形状、色、大きさもつぶさに見たが、「蔵志」の「九臓前面図」や「九臓背面図」「背骨側面図」などを見て想像していたものより実物ははるかに大きく逞しく、力がみなぎっているような気がした。

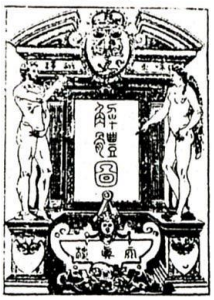
「肝臓は腹腔の一番上の少々右寄りにあって、黒味を帯びた赤褐色の、いやもうその大きいこと、子供の頭ぐらいもあるのにびっくりしました。そして重い。切り取って両手に持ちますとずしりと手にこたえてしかも柔らかいのです。真中に胆のうを抱えこむようにしていて、つくづく眺め指で触って私はいよいよ、人間のもつ大きさ、それからあたたかさのようなものを覚えました。東洋先生は『九臓前面図』に『肝濃紫色在一襞』と簡単に書かれていますが、その時の先生の感動が私たちに伝わりほんとに涙がこぼれました」

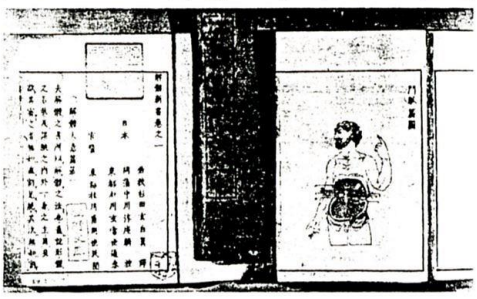
八ツ半（三時）までかかって調べ終えたという。

昼食は用意していたが少しも空腹は覚えず、ただ三人共無性に喉が渇いた。竹筒の水は飲み干したので砂を掘って湧き出る水を飲んだ。

切り刻んだ遺体は流木をつかって砂中に穴を掘って埋め、丁重に合掌してからひき上げた。

「刑死人を埋葬する事はお定書の条令に触れる事も存じておりましたが、わが手で内





臓を白日に晒したはいくら研究の為とは申せ、やはり哀れとも気の毒とも思いました。この記録を仕上げれば、わが手で厚く供養もしてやりたいと存じておりました」

「うむ、では、これが露見するとは予想しなかったのか」

新左衛門がきくと、いいえと芳寛は首を振った。

白昼堂々と人の寄りつかぬ河原に三人もの人間が動いているのだから誰かの目に止まらぬ筈がない。怪しんで藩庁に知らせるものもあるかも知れぬ。と彼は思った。が、腑分けはどうしても、まひるの明るい所でなければやれないのである。

「どんなお咎めを受けることになりましょう」

芳寛がきいた。

「うむ、追って沙汰をいたす。暫時下がって待て」

「はい、覚悟はしております。が、さほどの重罪とはなりますまい」

芳寛が妙に狎れ狎れしい言い方をした。

新左衛門が急に鋭い目を向けた。

「どうしてそう思うのだ。罪人とは申せ、死体を刃でもって損壊したは大罪じゃぞ」

「それはわかっておりますが、一昨年の三月二十六日、長州萩で、やはり東洋先生門下の栗山孝庵と申す医家が、吉右衛門という極悪の盗賊を腑分けいたしました。吉右衛門は磔刑を宣告されたのですが孝庵はお上に願い出て斬首にしてもらい、その上刑死人のお下げ渡しを申し出ました。萩藩はその願いを二つながら聞き届け、お蔭様で孝庵は師の『蔵志』の足らぬ所を勉強でき、お上のおはからいを感謝いたしました由、まだ刊行はしておりませぬが、やがて孝庵の手になる解体書も世に出ましょう。さすがに長州毛利様は大藩、これも人の命を預る者の勉強の為じゃとお重役衆もおおせになったと……」

「黙れ芳寛、口が過ぎるぞ」

新左衛門が大喝した。

「他藩はどうであれ、わが藩にはわが藩のやり方がある。他国の例を以てわが藩の仕置きを臆測し、刑死人を勝手に切り刻んで、それで罪が軽かろうとは何たる傲慢、さような事を宥していては法は守れぬ。追って応分の沙汰をいたすが、その間三人共入牢申しつける」

取り調べに同席しなかった国家老の犬甘式部は、この件の処置について厳しい意見であった。

「三カ月後には殿がご帰国になる。それ迄拘禁しておくがよろしかろう」

牢はちょうど五つとも空いていたので一人ずつ入れていたが、新左衛門と靱負は、だいたい半月程度の入牢で、あとは芳寛には敲き、千代と吉次郎には説諭ぐらいで放免するつもりであった。

新左衛門は、最後の芳寛の、人もなげなもの言いが幾分癇に触ったようだが、取り調べの中ではこの若い医者の研究心に心を打たれてもいたようだ。

だから式部の意見には困って、靱負に何とか老人の気持ちを宥める手だてはないものかという。

「うむ、追々にやるしかあるまいの」

靱負も困った顔でそうこたえた。

国家老の犬甘式部は七十歳に近く説得には少々時間がかかるのである。

藩主小笠原氏は中世、信濃国守護としてさかえ、小笠原流の武家礼法の宗家をもって重んじられたが、戦国期は武田信玄に仕え武田家滅亡後衰退した。のち徳川氏に属し豊前小倉で十五万石を領した。犬甘氏は信濃以来の重臣で豊前の本家から安志が分家した際特別につけられた家柄で代々の家老である。

何しろこれは前代未聞の事件で、裁いた例がない。

以前、ならず者が分限者の墓を暴いて副葬していた金品を奪い取った事件があった。これは棺中の遺体を抛り出し、放置した罪も重なって極刑に処した。

式部の頭にはその判例がひっかかっているらしかった。それとは動機において全く違うのだが医学の進歩とはいえ、畢竟己の利益の為に遺体を損壊した事に変わりはないと式部は主張する。

三カ月の入牢と式部が言った時、靱負の頭には、すぐに千代の、血の気の薄い顔と細い肩がうかんだ。

「三カ月はとても保ちますまい、あの妻女は」

新左衛門も同じ思いだったらしく、その時そう言った。

「うむ、しかし法は厳正公平でなければ、領国の秩序は保てぬからの」

式部は厳として自説を翻さぬ。

芳寛はその妻の身をどう思っているのか、入牢するやすぐに紙と筆墨の使用許可を乞うた。新左衛門が許すと、明るいうちは解体の絵図と説明書の作成に余念がない。

「そなたの主人は解剖記録を書くのに忙しそうじゃから、このお二方について知っている事があれば教えてほしい」
獄中へ入って靱負は千代に頼んだ。
「よろしゅうございます」
頷いた千代の目が輝いた。靱負はその目を美しいと思った。彼女は早速手紙を認めて家から一冊の書物を取り寄せた。夫の蔵書の一冊である。「養生院医則」とあって、山脇東洋の著作であった。
東洋は京都の医家で光寿院という号を持ち、法眼に任ぜられて中御門天皇の侍医までも勤める高名な人物らしい。が、実証を重んずる研究熱心な医家で、研究の為には身分などには全く頓着せず、どこへでも気軽に出かけ誰とでも会うという。
栗山孝庵については、靱負は芳寛にもあらためて質してみた。
彼も古医方の医者でありながら長崎へ何度も出かけている勉強好きな人物らしい。
東洋一門のこれらの解体には、残忍であるとか死んだ体を解剖しても生きた人間の病気の治療には全く役立たぬ、という非難や批判をする医家もたくさんあるようだが、とにかく実証的、進歩的な学風は東洋門下の特色なのであろう。
「医術の事は素人の手前などにはよくわかりませんが、山脇東洋やその教えを受けた松村芳寛達の、医家としての姿勢は、古い理論とわずかな経験だけを墨守している不勉強な手合いより医者としてずっと立派だと思います。此の度のこともその研究熱心から出たものでしょう。そろそろ宥してやってもよいのではありませぬか」
靱負が根気よく口説くと、齢と共に少しずつ頑固さを加えてきている式部もようやく頷いた。彼も靱負と新左衛門にかわるがわる言われて芳寛夫婦に対する態度も少しずつ、軟化してきていたのだ。
まず千代を放免する話をしている時、靱負と新左衛門が最初心配していた事が起こった。
千代が病に斃れたのである。入牢十七日目であった。食が進まず、色白の細面が透き通るようにあおみを増し、華奢な躯が一層細くなっていた。
すぐさま自宅へ送ることにしたが、彼女はここにいて夫の治療を受けたいという。芳寛もそう願うので、陣屋内の日当りのよい長屋の一部屋に寝かせ、看護の為に松村家から下女のおまきを呼んでやった。
布団や治療具も自宅から取り寄せさせた。

靱負は陣屋の右筆部屋に余っている長机を彼の牢へ運ばせてやった。芳寛はひどく喜んで早速その上へ紙をひろげた。
「犬甘殿に上申書を書くがよい」
靱負は奨めた。
「千代殿と吉次郎は自分のいいつけで仕方なくやったのだからお宥したまわりたい、そう書いて出せ」
すぐに芳寛は長文の上申書を書いた。
その結果、吉次郎が入牢八日間で放免となった。
千代の方も、と靱負と新左衛門は主張したが式部はやはり、うんと言わない。
この方法を思いつき夫をそそのかして実行させたのは彼女の疑いがある。なぜなら三年前、刑死人のお下げ渡しを願い出たのが彼女の発案、そう芳寛は自白していて、それが、お白州の記録に明記されているのだ。だから千代は、決して夫の命令で仕方なくやったわけではない、これが式部の厳として変らぬ意見。
それに、「大体女が死人の体を切り開くなんてまるで鬼か妖怪、考えただけでも怖ろしい。世も末よ」家中のそんな意見が式部の所へよく寄せられるらしい。
靱負は何度か牢内の彼女を見舞ってやった。薄暗い牢の、左奥の隅のおすべりの上に、うつむきがちに、いつも同じような格好で彼女は坐っていた。けれど背筋はきちんと伸ばしている。それが彼女の勝気を現しているように靱負は思った。
格子の外から声をかけると、ちょっと顔を上げて彼の方へ視線をおくり黙礼する。切長の目が、痩せて蒼白い顔に張りついたように大きく、妙に強い光を放っていた。
靱負は、その目に少し辟易しながらも、やはり放っておけない気がした。
「たとえ普段血を見慣れているとは申せ、人の躯の中を見るなどは怖ろしゅうはなかったか」
新左衛門が取り調べの時にきくと、彼女は素直に頷いた。
「はい、それは怖ろしゅうございました」
そうであろう、納得したといった顔で新左衛門が言った。
「でも、これはぜひやらねばと主人も私も願っていた事でしたから」
細い声できっぱりとこたえ、新左衛門を見上げた。
「この山脇東洋と栗山孝庵なる人物についてできるだけ詳しく調べてみてくれぬか」
芳寛の提出した上申書を示して式部が靱負に命じた。

「至れり尽くせりじゃの、其の方らは」
式部は多少皮肉をこめて二人に言ったが、彼も内心不賛成ではないのである。
「どうじゃの、診立ては」
靱負が夫の芳寛に尋ねた。
「風疾（風邪）です。頭痛腰痛がある上、熱もあって悪感がするようですから」
「命に別条はないであろうな」
「いえ、風疾も油断はできません。悪質だったり体が弱っている時は、命にかかわります。過去にはそんな酷い例がたくさんあります。たとえば『泰平年表』や『武江年表』、『成形図説』などの記録によりますと、享保十八年の流行には四人に一人の死者が出ています」
「四人に一人とはまた大変な死病ではないか」
「はい、しかしまあこの記録は、享保の飢饉の折で餓死者も含まれていますし、気候不順の上に滋養物などとても摂れなかったせいです。今は気候もよいし、お蔭様で滋養物も頂いていますから、大事に養生すれば心配あるまいと存じます」
しかし病状はその後もあまりはかばかしくなく、嘔吐したり咳も長びく。芳寛はほとんどつきっきりで看病した。
これも前例のない事であったが新左衛門は牢役人に命じて、逃亡のおそれのない芳寛を自由にさせてやっていた。
ある時靱負が千代を見舞うと、芳寛は隣室の板の間で薬の調合をしていて、下女のおまきが枕元に詰めていた。
「いかがじゃな」
枕元に坐って声をかけると千代は目顔で礼を言い、そして急に手で布団を持ち上げようとした。
「いかがなされた」
「ご中老様にお願いがございます」
「うん？」
「ぜひぜひお願いしたい事がございます」
尋常ならぬ目の光で、その目が熱のためかうるんで頬も赧い。
「うむ、何なりと申すがよい」
「わたし、わたしがもし死にましたら、どうかこの躯を主人芳寛に下げ渡してやって下さいませ」
靱負ははっとして病者を見つめた。彼女は夢中で身動ぎした。半身を起こそうとしている。靱負は慌てて手で制した、
かすかに熱の虜のむれた匂いがした。
「私が自分の躯をそうしたいと願うのですから、どうぞお許し下さいませ。あなた様からご家老様やお目付様にぜひお願いを……」
「奥様いけません、いけません。何というおそろしい事を、そんな事できるものですか」
おまきが肝を潰してにじり寄るのを、
「お前の口出しなど許しませぬ。これは私の、私の後生一生の頼み……」
ぜいぜいと息を切らした。まきが慌てて胸をなぜる。その手を押しのけて千代は掠れた声で続ける。
「大畑の遺体は首がありませんなんだ。ですから口腔、咽喉や頸椎などの様子がわからず、芳寛はそれをどんなに残念がりました事か。でも私のこの躯は痩せ細っておりますが、無疵で五体揃っております。大畑では検分できなかった所も見ることができましょう。それに……」
火のような息がつと途切れた。二度三度、大きく頷くようにして息を吸い込む。必死に靱負をみつめる、例の、妖しいばかりの目にふと羞恥の色がうかんだ。
「去年、宝暦九年の六月には、主人の申しました長州の医家、栗原孝庵殿が萩城下の刑場で斬首となった阿美濃とか申す女因を解剖されました由」
「ほう、女因を。それはまことか」
「はい、日本で最初の女体解剖で、その上孝庵殿が長崎から連れてこられた田英仙という医家の執刀で、ですからこれも最初の医家の手による解剖だったそうでございます」
喘いではまた大きく息を吸い込む。
「孝庵殿はその時、主として生殖器官をつぶさに調べ、その報告書を東洋先生の元へ再び送られましたそうな。主人はあとでそれを聞いて、事前に知っていたら萩までぐらい飛んでいったものを、と地団駄踏まんばかりにくやしがりました。孝庵殿と主人とは京の東洋先生の元で机を並べ、成績の首位を争い合った仲でしたから、そのくやしさは私にも痛い程わかるのです。ですからこの私をぜひ主人の自由に、この躯を…」

「わかった。ようくわかったゆえ、もうお止めなさい」
「えっ、では叶えて頂けますか、私の願い」
見る見る目に涙がふくれ上がった。
「うむ、きっと力になろう。私の一存では決められぬが、そなたの一途な気持ちはよくわかった。ご家老や横川を必ず説得しよう。が、肝腎のそなたの主人はどうじゃ。いくら医術の研究の為とはいえ、よもや自分の分身とも思う妻の躯を。そんな事はとてもできぬはずじゃ」
女の口元にかすかな笑みがうかんだ。
「いいえ、それは心配ありませぬ。夫は、私が望めば私の躯を研究に役立ててくれます」
「そなたは今、熱にうかされておるのじゃ。その願いはこの靱負、たしかに肚に納めたゆえ、さ、もうそんな事は考えずにお寝みなされ。芳寛殿が一番喜ぶのは、そなたが元通り元気になられる事よ」
胸元の布団を直してやろうとした靱負の手をか細い手がいきなり握った。
「これは高熱による妄想などではありませぬ。私の、命を懸けた大事な願い、ですからそのおつもりで決してあだになさらないで――」
うむ、と靱負は、その手をおのれの手の中に包んで大きく頷いてみせた。

靱負は御用部屋で犬甘式部と横川新左衛門にそれを伝えた。
話しているうち彼は、自分が、真赤な、何かとてつもなく大きな花の中に包まれていくような、少しぼんやりした気分に陥った。
二人は腕を組んで黙ってきいていた。
「芳寛がもしそれを望むなら、許してやりましょう」
靱負はわざと、そっけない声でいった。
二人は黙って顔を見合わせ、そしてこくりと頷いた。
その日の夕方、薬を服用後に千代がうとうとしている時、靱負は長屋の外の中庭でそれを芳寛に伝えた。
そうですか、至極平然とした顔で彼はこたえた。
「あれは私に、何度もそう言っております」
「では其の方、ほんとにそれをやるつもりか」

「わかりません。その時になればそうするかも知れませんが、今は千代の病を治す事で頭がいっぱいで。しかし、あれには、わかった、そうしょうといっております。うるさいですからね」
「うるさい？」
「はい、そういわなければ、思い詰めて治る病も治りませんから」
「なるほど」
「お気遣い頂いて有難うございます。けれど――」
「うん？」
「千代は助かります。決して死なせはしませぬ」
「おいッほんとうか。その一言、違えたりすまいな」
「はい、違えませぬ。きっと助けます」
芳寛は力強く頷き、両手に握った濡手拭いをぎゅっと絞り、二三度それを振って滴を落とした。
額に汗の玉が光っていた。

終

サルに魅せられて

野生動物写真家　松　岡　史　朗
山崎町鹿沢出身

故郷山崎町を離れ、もう二十年が経ちました。現在、本州最北青森県の、ちょうどまさかりの刃の形をした下北半島の先端部にあたる脇野沢村という小さな漁村に住んでいます。ねぶた祭り・棟方志功・世界最北限のサル、世界に誇れる青森県の代表的な事柄と私が勝手に思い込んでいますが、この世界最北限のサルの棲む村が、私が住んでいる脇野沢村なのです。そして、そんなサル達の生きざまを観察・研究し写真に撮っています。

昔話や童話の影響もあるようですが、日本人の持つニホンザル観は、「恐い」「ずる賢い」というのが一般的なようです。なるほど、サル山公園や餌付け場でのサルは、叫び声をあげることが多く、人に対しても威嚇をし、自分の強さを誇示する行動がよく観られます。山崎町の人々にとって、サルといえば餌付けされた瑠璃寺のサルが馴染み深いものですが、好意的な動物というよりも、むしろ厄介者と映っているのではないでしょうか。しかし、それはあくまでも人が与えた餌に群がるサルの姿であり、山の中を遊動し自力で食べ物を取る野生本来のサルからは決してその様な姿は観られません。野生のサル達は、実にのどかで、ひょうひょうと、そしてしたたかに暮らしています。

日本の各地で今も行なわれているニホンザルの餌付けは、観光目的の他にサルの保護・研究ということも一つのねらいでした。餌付けによって今まで知られていなかったサル社会の一端を垣間見ることもできたし、サルという動物が私達にとって身近かな生き物にもなりました。このように餌付けの成果ももちろん挙げられますが、餌を与えることによってサルが人に慣れ、野生本来の姿から離れてしまい、歪曲したサル社会となってしまったこと、また、個体数が増加し、それに伴う農作物への被害が増え、人とサルとのトラブルが生じていることなどが弊害となっています。そして、何よりも餌付けの一番の弊害は、歪曲したサル社会から得られたニホンザル観が、さもそれが野生本来のサルの姿のように我々日本人の心に植え付けられてしまったということに尽きます。「恐い」「ずる賢い」はそんなところからきているのです。

どんな職業でも既存のものを打ち破り、新しい見解を創りだすことは至難のわざですが、私は、野生のサルの観察・撮影を通し、日本人の持つニホンザル観が少しでも変わってくれることを期待して、毎日毎日サルの群れを追っています。

また、世界中に約一八〇種ものサルが棲んでいます。そしてサルの仲間は、大変バラエティーに富んでおり、他の動物と比べて最も共通点の少ない、言い換えれば一つ一つが特徴を持った動物だと言われています。生息域を調べても、南アメリカ・東南アジア・アフリカの熱帯雨林から亜熱帯、サバンナそして厳寒の地、下北半島までの広がりを持ち、外観も、全く猿らしからぬサルもいれば、体重が二〇〇キログラム以上のマウンティンゴリラのような象徴的な輩もいて、世界の広さをしみじみと感じさせてくれます。

今後の目標として、ニホンザルだけにとどまらず、できる限り多くの世界中のサル達の真の姿を紹介していきたいと思っています。

筆者のプロフィール

氏は獣医であり、その野生動物の生態写真に於ける実績は、テレビ、新聞、雑誌などで高く評価され、掲載、或は出版されています。世界中の猿の仲間を記録することが、氏の夢だそうです。

曲がる石の話

京都大学理学部　講師　清　水　大吉郎
山崎町鹿沢出身

石・岩・岩石などと言うと固いものの代表とされていて、そこから派生して、石頭とか、石部金吉などという言葉も生まれている。実際に岩石は固くて割るのには苦労する。ところが世の中は広いもので、この石の中に曲がる石がある。お聞きになったことがあるかもしれない。固いはずの石がなぜ曲がるのか、それはまだ完全には解明されていない。また、そんな石がどこにあるのかといったことを紹介したい。

私が曲がる石をはじめて見たのは学生の頃で、その時は単に珍らしい石という印象しか残っていない。また見せて下さった先生も産地について確かなことは知っておられなかった。

その後、インドへ調査に行った際、調査が終ったあとで、珍らしい石の産地ということで案内されて、標本を取って帰ったことがある。その時は、深く調べもせず、珍らしい石として人に差し上げたりした。数年前、あるプラスチック会社の方が研究室を訪問され、曲がる石のことについていろいろ質問されたので、知っている限りのことを話したことがある。先方の目的は、その会社では新しい素材をいろいろと研究されていて、例えば曲がる石のような素材で建築物を作れば、地震に強いビルが出来るのではないかといった発想のようであった。その後、ほかにもセラミックス関係の人が関心を持っているとも聞いている。そこで少し調べてみると、岩石の専門家でも正しい知識を持っている人はほとんどなく、例えば、雲母の結晶が入っているので曲がるのだというような誤解が広まっていることがわかった。

文献を当ってみると、この曲がる石の発見は古く、十八世紀の後半である。場所はブラジルで、サンパウロのずっと北にイタコルム山というのがあり、その近くで発見されたことから、イタコルマイトと名付けられた（アイトというのは、石を意味するラテン語の語尾）。この発見はヨーロッパの学者の注目を集め、いくつかの考察がなされた。そもそも発見されたのがダイヤモンド探しの過程であったこともあって、ダイヤモンドの産出と、曲がる石との関連を論じた真面目な論文もある。ただし、この論文は現在読むと的はずれである。

この奇妙な曲がる石は世界中で探され、各地での発見が報ぜられた。現在確かなものは、ブラジル一カ所、インド一カ所と、アメリカ合衆国東南部の数カ所のみである（フランスにもあるとのこと）。そして十九世紀にいくつかの研究がある。二十世紀のはじめまでに、多くの研究者の間で到達した結論のいくつかをあげると、この石は石英粒子の集りである、そして石英粒子の形がギザギザであること、石英粒子の間にすき間があって、石英粒子がからみあって、いわばギクシャクと曲がるのだということである。雲母の役割は否定されている。

インドの産地で見ると、今から十数億年前に出来た石英粒子の集った砂岩層の中にある。当時山をなしていた岩石がこわれ水で流され運ばれる間に、他の鉱物粒子は分解してしまい、石英粒子だけが円い砂粒として砂岩層を作った。それが現在では完全に団結して固い岩石になっている。その中には水の流れでできた波形の模様がある。ところがその固い層の中の厚さ三メートルだけのところに曲がる石がある。前にのべたように多くのすき間があるが、これはもともとあったものが溶けてぬけ出たあとらしい。ギザギザの石英粒子は円い小さい粒子が結合してできたものらしい。同志社大学の鈴木博之氏が電子顕微鏡で調べたところでも凸凹の多い粒子が集っていることがわかった。また同氏は曲がる石に樹脂をしみこませたあと、石英粒子のほうをフッ酸という強い酸で溶かすと、樹脂が網目のように残り、全体にすき間があることがわかった。ブラジル産やアメリカ産のものも多少違った点はあるが基本的機構は同じで、鈴木氏はジクソーパズルのように曲がるのだと言っている。

曲がる石の出来た成因はまだわからないことがあるが、十数億年の歴史の中で、さまざまな現象が起った最後の産物を我々が手にしているとだけは言える。

筆者のプロフィール

氏の専門分野は地質学で、古い地層、化石などについて、研究されています。主な著書には「日本の地質、近畿地方編」など、多数あります。

短歌

新樹第三集を読む

山崎歌人協会
藤原すみ

新樹第三集が出版されました。第一集の出詠者十四名が出版の回を重ねて第三集では二十八名に増加しています。藤村先生の御指導の下に写生に徹し単純化に心掛け声調を重んじると言う長年の精進の成果として上梓されました事は意義深いものがあると共に他を励ますものがあると思います。出詠者の中から山崎在住の作者の作品を抄出して取上げてみたいと思います。

雪降るを何より先に知る指の皺こよひ疼きて止まず　安東はつ子

道化師に笑はせられて笑ひたるわれをわびしむ帰りの路に

泣くまじと決めゐし心くづほれて花嫁の娘より花束を受く

手焙りの小さきが売れて久びさに打ちたるレジに指の弾めり

店の売上げに心を使いながら皺に天気を占い嫁ぐ娘に涙する母の心情が溺れる事なく歌われていて、心温むるものが伝わって来ます。

永遠の命の無しと知りながら母が死ぬとは思ひみざりき　北　隆治

判るかと問へば判ると答へしが母と最後の会話となれり

よく来たと常に迎へてくれし母いまさず仏間にひとり鉦打つ

奪ひあひ遊びし玩具そのままに帰りて温き余韻を残す

母が死ぬとは思ってもみなかった作者。その母を失ってひとり仏間に鉦を打っている作者の孤独な心。しみじみと悲しみが伝わって来ます。

癒ゆるなき命にそそぐ点滴が透明の管しづかにくだる　栗山　節子

起伏なくなりゆく姉の心電図余韻のごとく鼓動を刻む

三昧と呼びて忌みたる村の墓地姉の葬の香に煙れり

自転車をこぎゆく須臾の視角にて飛行機雲は月つらぬきぬ

死期の近い姉の枕頭にいる作者の眼が、点滴の輸液の音もなく透明な管をくだってゆくのを見つめている。写実に徹した表現の中に深い悲しみを伝えて余情がある。

紙風船とばし厨に騒ぐ孫戒めながら吾も掌に打つ　小林　郁子

炎天に息弾ませて帰りし児冷えし麦茶を一いきに飲む

物言はば谺返らむ茶畑に真昼もだして一人摘みをり

騒ぐ孫を戒めながら作者も風船を掌に打ってゐる。ほほえましい一刻にある作者その動きや心までよく描写されていて情景を彷彿とさせてくれます。

百年を育ちし柿の切り株に涙の如く樹液光れり　冨和かず子

スーパーのレジに並びて独り居の生活(くらし)見らるる思ひに立てり

誤解とく術はなきやと侘しみて畑に屈まり葱坊主折る

列なりて坂下りゆく生徒等のペタルに長き足を遊ばす。

一人暮しの日々の哀歓が作者の素直な眼によって描き出されて沁々とした共感を誘います。

つつみたる蛍ほのかに点す灯にハンカチ赤き花柄浮ぶ　森本萬千子

サングラス外さず話する友にこころ通はぬおもひに応ふ

口細き壜より捨つる水の音淀むおもひを吐くごとく鳴る

ゆきずりと言へど交ごもことかはす夏の山路の人ら明るく

淀む思ひを吐くごとく鳴る、水を捨てる壜の口が鳴ってゐる。作者の心象風景がさらりと描かれてありながら、深い憂愁を湛えて心惹かれます。

成人式に出て行く孫が華やぎし振袖の香を部屋に残せり　山田百合枝

色あせし幟一本はためきて荒神さまの小さき祭

碁を打てる男四人の静かなる遊びよ部屋に咳一つせず

色あせた幟一本だけ立てた村の小さな荒神様のお祭り、成人式の孫の振袖、夫の打つ碁、日常の身辺を拾い上げて主婦の目を感じる心の通った作品です。

古里の白谷の滝めざしつつ豊かに変る家家を見つ　山本　千代

山深き放牧場の一軒家洗濯物を竿高く干す

産土の杜に涼みて汗ひきし孫は腕に重く眠れり

預れる孫の帰りしくつろぎに宵の明星輝きを増す

昼間は孫を預って御守りをされるその責任の重さ、腕に重くなって寝息をたて初めた孫を見る作者の交錯したやさしい目を感じます。

各地短歌祭入賞入選作品

◇第十一回郡民短歌祭の記

第十一回宍粟郡民短歌祭は八月二十三日、山崎町文化会館で催された。出詠歌一二二首、出席者八十六名。長田執県会議員、安井淳三山崎町長を来賓に迎え、十三時三十分開会。

来賓祝辞に続いて、出席者の作品につき藤村省三、稲村幸子両氏の懇切な講評がおこなわれた。

・知事賞

登校拒否続けしのちに職を得し少年単車に生き生きと乗る　佐々木タエ子

・神戸新聞社賞

キャッシュカード入れて無言の機械より給料うくる事にも慣れぬ　釜付　靖子

・山崎町長賞

風のごと帰りてシャワーの音たつるこの少年もやがて離らむ　山崎きよ子

・宍粟郡文化協会連絡協議会賞

片方は履き帰りしか遊び場に幼の赤き靴暮れなづむ　倉田美代子

・山崎歌話会六十周年記念賞

仔牛らに餌与へゐる厩内に燕も濡れて餌運びくる　伊東まさ子

・宍粟郡歌人連盟賞

彼の日より五十五年か征きしまま還らぬ父を子らの覚えず　北川　智恵

鶏も狸も飼へる保育所に孫は裸足の足を気にせず　篠本　久子

雨もまた天の配剤トロ箱に挿し芽の菊の青く伸びゆく　安政　嘉子

工事場のロボットの振る信号に髭の男ら作業にかかる　進藤てる子

商ひをひと日離れて菜園に汗流す夫いきいきとせり　安東はつ子

競り市に買はれし牛が鼻面に赤札つけて荷台に鳴きをり　小林　郁子

◇ふれあいの祭典ひょうご'92短歌祭開催される

ふれあいの祭典ひょうご'92短歌祭は、兵庫県、山崎町、山崎町教育委員会、県歌人クラブなどの共催で、晴天の十一月十五日、山崎町文化会館で催された。

出詠歌は一般が一四九八首、高校中学生が一六三二首の多くに及び、出席者は三六〇名の盛会であった。

会は定刻の正午開会。県歌人クラブ代表米口實氏の開会のことばに続き、主催者代表として山崎町長安井淳三氏挨拶、山崎町文化協会長壷阪壽氏挨拶のあと歌人小池光氏の「短歌の昨日、今日、明日」と題する講演がおこなわれた。その後、

入賞者の表彰式に続き、アトラクションとして川戸岩田神社に伝わる伝統芸能の獅子舞が上演され、会場の喝采を浴びたあと、藤村省三氏の閉会のことばで全体会を終った。少憩ののち会場を二階の研修室に移し分科会に入って、出席者の作品について、歌人クラブ幹事の栗山節子氏らが分担して講評にあたった。

・宍粟郡文化協会連絡協議会賞

左利きかと聞かれたる子はテーブルの下に麻痺せる右手隠せり　新井　慶子

・入　選

待機する消防士らがプランターを並べて小さき菜園を持つ　伊東まさ子

汗のシャツ絞りて干しし庭木師は乾けるを着てまた木に登る　北川　智恵

開け放つ窓に涼しき風入れて優しき今日をねがふ眉引く　中田　博子

父母の背を流しし記憶なきわれの心ゆくまでみ墓を洗ふ　田中　君枝

百姓に停年なしと九十の母は鎌とぐりズム保ちて　瀧元　善子

◇西播磨短歌祭

（十二月十二日、西播磨文化会館）

・県議会議長賞

柵越しに差し出す草を食みてゐし仔牛駆くれば子等も駆けゆく　伊東まさ子

・県文化協会長賞

手網より零れて生簀にもどりたる天魚すばやく群にまじりぬ　山崎きよ子

・奨励賞

涙ぐむわれを見上げし幼孫ポケットの飴一つくれたり　進藤てる子

俳句

青嶺句会詠草

一日花一日の色むくげ咲く　芦田八重
雑念の捨て所なく青き踏む　秋光久子
主治医より一言もらい髪洗う　石野光栄
いさかいし悔の大きく遠蛙　大谷延子
方言がとび交ふ出雲神の旅　岸野昭三
春の昼仲間はずれの爪を切る　高野南嶺
惜しみなく切り呉れし女酔芙蓉　高野薫風
煙より人あらわるる野焼かな　下村君子
晩学の歳時記探る梅雨ごもり　杉本いし
わだかまり解けて真赤な鶏頭花　杉山美保子
地球儀の旅果てしなく秋灯下　田中良子
ずり落ちる眼鏡おさえて炎天下　友沢恭子
言はでもの一言を悔い長き夜　永井とみ代
緑蔭に閉じたるまゝの抗深し　中尾悦生
塩口伝自慢の茎を漬けにけり　中嶋ひろ
番犬の大欠伸して春の昼　原田小次郎
病む母へ添へる一言年賀状　原田百合

和田疎人

コーラスの声流れゆく緑蔭に　原田駆雲
単線の線路一とすじ青田中　春名寿女
老いたれど燃ゆるもの欲し鶏頭花　秦　千里
落城の哀史礎石に秋の風　福田泊水
春昼の間のびして鳴る古時計　藤家千代
大瀧の凍りて時の止りたり　山田東軒
初時雨煎じ薬の匂ふ路地　山口栄子

☆☆☆☆☆

硯海に映る神の灯筆始め　和田疎人

山脈句会詠草

田かき終え水面に残る月一つ　尾崎すゞ子
山路来て木の葉に掬う岩清水　尾崎いつゑ
朝もやに墨絵のごとき冬木立　小倉つね
花火見る川風涼し橋の上　小倉れい子
夕ぐれの束の間惜しむ蝉時雨　垣口翔人
たわむるゝ犬と少女と落葉中　木村一子
妻迎う千種の郷の初時雨　高野薫風
送り火や浄土へ一すじ道照らす　小嶋弥生
句の出来し安らぎにあり密柑むく　小畑柏人
補聴器が捜してくれる虫の声　小紫いく
藍匂ふ浴衣爽やか風呂上り　庄よし子
末枯れゆく野路の夕風一入に　田中　恵
羅漢にもそれぞれの相秋深む　田中やえこ
雨だれの沈む深さの竜の玉　土井てい
咲くもあり散るもさだめか沙羅の花　牲川信子
里かえり三世代揃いて良夜かな　畑林かずゑ
憩いたる石のぬくもり春隣　姫野まさ子
姑看取る真夜のちちろの声佗びし　前野さつき
通夜の灯を大きく揺らし野分ゆく　山田すま

☆☆☆☆☆

城崎温泉にて
この路地を行けば花石蕗満開に　和田疎人

さわらび句会

逆縁の魂まつる脊の老ひませり　庄　昌子
細き月暫く在りて夜の寒き　小林紫生
鶺鴒の小川に石蹴りあそびかな　藤井七代
野菊摘む幼な身体に力こめ　山中正子
紅蜀葵塀を抽きんづ炎えたちて　山岸園子
老ひてなほ母は母なり茄子の花　薄木満寿恵
行きづりに觸れて発たすや草の絮　壺阪加代子
もの思ふ心生まれし散紅葉　川崎栄子
昼の虫とぎれて狭庭の翳深む　本條淑子

☆☆☆☆☆

末弟の吾のみ残り霊送り　和田疎人

余花の明石公園を尋ねて

山崎俳句協会青嶺句会
永井　とみ代

四月十二日青嶺句会吟行

今回は和田疎人先生の奥様も参加して下さり、一行十八名は、寒の戻りを思わす様な寒い朝、西信駐車場に集合、九時出発明石へと向った。

発車と同時に激しい雨となり、窓からの遠景色は霞んで殆ど見えない。でも車中は和気藹々と話がはずみ、十時半明石に着いた頃には雨も止んでいた。私達は余花の明石公園へと下りる。

行く春を惜しんで落花の下、筵をひろげる人、花吹雪の中ジョギングをする人、ボール遊びをする人等を見ながら、そぞろ歩きをしたり、ベンチに腰をおろして句想を練る。その頃には薄陽もさし、剛の池にボートを漕ぐ若者の姿もみえる。

春爛漫の明石公園を後に、句会場となっている明石勤労福祉会館へと向かう。

句会場は、会館二階の広い静かな会議室の様な部屋が用意されていた。そこで、海の幸をふんだんに使った美味しい昼食を頂き、一時締め切りで投句、句会に入る。披講の途中、大阪へ転居された句友の友沢恭子様が見えられ、久闊を喜びながら句会を終える。

鳩翔てるたび花びらを煽ちつつ　疎人
ブランコの揺れて落花のひとしきり　駆雲
杖つきて花の吟行しんがりに　千里
労わりて夫婦麗わし花の下　光子
コンパクト開けば春の陽がはじく　いし
花筏帯の如くに城の池　千代
花愛でるゆとりもすこし看取妻　延子
目にうつる総べてが句材城の春　光栄
花びらの流れる遅速水清く　とみ代
呼べば来て呉れそうな雲浮きて春　南嶺
余花の園鳩一枚の紙に発つ　八重
腰下すベンチ冷やか花ぐもり　泊水
花びらの浮くところ得て水光る　栄子
花は葉へ春惜しみつつ吟行す　良子
雨止みてほぐれる心花巡る　小次郎
堰たまり流るるもあり花の散る　君子
万人の心和ます桜かな　美保子

句会後下のロビーでお茶を飲み、再会を約して、駅の前で友沢さんと別れる。

魚の柵で買物をし、五時帰途につく。

車に乗った途端パラパラと雨が降り出す。明石は初めてと云う人も多く、今日一日の楽しかったこと、それぞれの句のこと、又は来年の吟行のことと、おしゃべりはつきず車中は賑やか。

途中姫路のドライブインで休憩をし、七時頃山崎に着いた時には雨は止んで居り、お天気に恵まれたことを感謝しつつ解散する。

第十四回春の芸能祭ご案内

日　時　平成五年五月五日（祝）
　　午前十時半から午後四時まで
場　所　山崎文化会館
主　催　山崎文化会館・山崎町文化協会
後　援　神戸新聞社・山崎町教育委員会

会員、一体となり、練習を重ねております。その成果をぜひ観賞くださるよう、ご案内申しあげます。

参加部門
山崎詩舞道連盟
山崎謡曲同好会
山崎郷土芸能保存会
山崎邦楽邦舞研究会
さつき民謡グループ
（芸能祭実行委員会）

『西播磨ふれあい文化交流会』に寄せて

県立西播磨文化会館　松本敏和

いま、兵庫県は「こころ豊かな人づくり」をスローガンに種々の施策を展開しております。そんなとき、自主的な活動として西播磨ふれあい文化交流会の記念すべき第一回が、山崎町文化協会の主催で開かれ、各地域から多勢の文化協会員が一堂に集い盛会裡に終えられましたことは、喜びに絶えません。と同時に、その企画・運営にあたられた山崎町文化協会関係者の皆様のご厚意に深甚の敬意を表します。

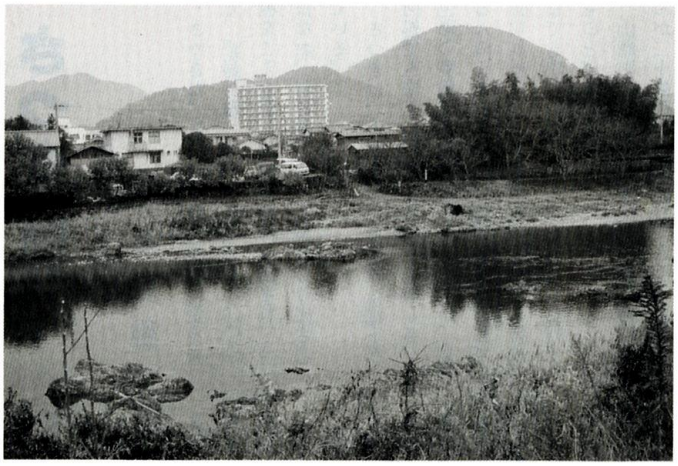
さて、本会は、西文連会長・山崎町文化協会長壷阪壽氏の「互いの文化協会の交流を通して地域文化を高め合うことの大切さ」についての挨拶で始まり、山崎町文化協会の活動状況の発表・揖保川の高瀬舟についての講話、昼食・懇談のあとの現地見学、山崎実験センター・郷土館の視察という内容で充実した交流会となりました。

郷土館では、土器・銅鐸と本多氏の宝物などの数々の品をまのあたりにし、二千年以上も前の人たちの素朴な生活をしていた様子が思い浮かんできたり、世の常とはいうものの戦（いくさ）の血なまぐささが伝わり、度肝を抜かれたりしました。また揖保川を見学しながら、たくさんの荷物を積んだ高瀬舟が往来し、威勢のよい人の声があちらこちらから聞こえてくる活気ある当時の揖保川を想像させられました。このように、先祖の遺物や生活環境などに接し、いろいろな事を学ぶことができました。一つには、自然を上手に利用していることです。いや人の力でどうすることもできず、否応なく自然とのつき合い方を人のほうが工夫しているのです。土から金属の器、揖保川の高瀬舟等は、ゆったりとした年月の流れの中で、みんなで知恵を出しあっていつの間にか編み出されてきたものでしょう。それが文化であり、文化は必ずそういった一面を持つものと思います。二つめは、人の欲と戦についてですが、これは、一概に言うことのできない、なかなか難しいものです。

山崎は、たいへん文化活動の盛んな町であることは、私が申し上げるまでもなく、皆様がよくご承知の通りです。そして文化人として活躍されている方々がたくさんおられるのも、文化財が大切に保護・保存されているのも、このような豊かな歴史的土壌があればこそと教えられました。その一方で、時代の最先端をいく科学技術を駆使した関西電力山崎実験所では、指一本で快適な生活空間を創り出す未来の住まいを見学し、もうここまできているのかと夢を見ているここちでした。

このように、過去・現在・未来が渾然一体となって躍動している町、山崎で、参加文化協会員相互がふれあうことができました。

ところで、物が豊かになり、道具が発達し、生活も便利になったおかげで、欲していた余暇を手に入れることができるようになりました。でも、何か虚しさを覚えます。これはどこからくるのでしょうか。きっと、昔ほど人と人との関わりあいを大切にしなくても、一人で十分生きていかれるようになったからでしょう。また、人と関わりあうことを煩わしいと感じとる人が増えているのではないでしょうか。しかし、物を求めて、皆が必死になって、協力しあって生き延びてきた時代があったように、文化を求めて、一人一人が関わりあうことの良さを、一つ一つ積み重ねていくことが、今、私たちに求められているのではないでしょうか。文化を通して人と人がふれあう過程にこそ、こころの豊かさが醸し出されてくると考えられます。そういった意味でも、今回の山崎でのふれあい文化交流会は、たいへん意義深いものだったと思います。この交流会が、二回、三回と引き継がれていくことが、文化の発展につながるものと考えています。



往時の高瀬舟
舟着場附近
（揖保川中広瀬）

山崎文化会館前にふるさとの歌碑を建立

新潮会　藤村清一

新潮会は発足四十周年を記念して平成四年十一月、山崎文化会館前の中央花壇に大きな歌碑を建てた。

古くから町の人たちに愛誦されてきた野口雨情作詞、中山晋平作曲による「山崎小唄」と「宍粟民謡」はじめ池添静雄作詞、岡千秋作曲の「さつき音頭」。富田砕花作詞、信時潔作曲による「山崎町町歌」の四曲の歌詞を刻み込んだもの。

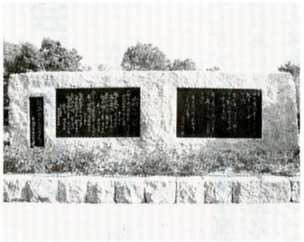
大きさは横四・一五メートル、縦一・三五メートル、奥行き八〇センチ。西面に「山崎小唄」と「宍粟民謡」。東面に「さつき音頭」と「山崎町町歌」を刻んでいる。石材は小豆島産の福田石とアフリカ産の黒みかげ石。

「宍粟民謡」の文字については、北魚町、菊水の志水伸一さん所有の野口雨情さん直筆の歌詞の提供を受け、この文字を、そのまま刻み、あとの三曲は同会、会員の書家、田内龍暘さんの筆によるもの。

歌碑の横には町内で初めてという四曲のメロディーを奏でるセンサーボックスを取り付け、ボタンを押すとメロディーが流れるようになっている。

歌碑の除幕式は平成四年十一月八日、山崎文化会館前に長田執県会議員、安井淳三町長、小畑欽之助教育長、山中陽一医師会長、下山正徳山崎警察署長、西山政男文化会館長、大畑芳一西兵庫信用金庫専務理事はじめ会員と家族ら約六十人が集まって開かれた。席上、新潮会記念事業実行委員会の壷阪壽会長は「ふるさとの中で、長い間うたい継がれた山崎町にふさわしい歌を残そうとの願いを込めて、この歌碑を作った」とあいさつ。

同会は昭和三十六年、鹿沢の山崎闇斉神社境内に作家、吉川英治さんの「奉献の辞碑」。同四十八年、町役場前に「山崎町民憲章の碑」を建てており、こんどの歌碑は三基目の石碑の建立になる。



「山崎小唄」など刻んだ歌碑
（山崎文化会館前で）

さつき祭り

播磨さつき会　小池忠雄

さつきは、江戸時代から現代に至るまで、記録に残っているだけでも二〇〇〇種をこえる多くの品種が作り出され、今日なお、毎年幾つかの新種が作り出されている。

さつきは、木が丈夫で作り易く誰でも、何処でも楽しめ、さつきの花の美しさ、色彩の多様さ、変化のおもしろさが、見る人の心を引きつけ、花芸と盆樹として底知れぬ味わいを秘めているから、将来までも決して衰えぬ人気を保持して行くものと思われる。

山崎町のさつきの歴史は、樽岡定二さんが二十歳代の半ばから、さつき栽培を始められた由、戦前には他に同好者もなく、戦後になってさつきに魅せられた者が少しづつ増え、昭和三十一年、地元をはじめ西播地方の愛好家に呼びかけられ、播磨さつき同好会が結成された。

昭和三十五年に第一回のさつき展が始まったが、当時は一般の関心は薄く、参観者も近隣者で多くはなかったが、回を重ねるたびにさつき愛好者もだんだん増え、祭り会場も人であふれる盛況になった。

町民や愛好者が気楽に観賞できるようにと、昭和四十一年には町営さつきセンターが開設され、昭和四十三年にはさつきが町花に選定されて、一般の栽培熱も高まり、第一回～第八回まで続いたさつき展を、第九回よりさつき祭りに改称し、町ぐるみの花の祭典に盛り上げ、関西一円はもとより、島根・広島・鳥取・岡山から多くの入込客で賑わうようになった。

更に、昭和五十年には、中国道の福崎～美作間の開通により遠方からの入込客も増え、昭和五十三年にはさつき音頭が発表されるなど、さつき祭りは、県下でも大きなイベントとして発展していった。

山崎町には一軒のさつき専門業者もなく、このさつき祭りは、樽岡さんが始められたさつき作りから愛好家が増え、そして、山崎町全体がさつき熱にとりつかれたように、これが布石となり大きくなっていったが、さつき熱も下りつつある中で、各地でも、さつき展がいたるところで催されるようになり、入込客の減少、生産者の減少、播磨さつき会員も少なくなって来ていることは、否めない事実である。

三十三年間も盛大に続いたこの祭りを衰退させることなく、〝町のシンボル〟さつき振興を町の力添えを得、名実ともに、活気あふれる祭りを期待したいものである。

城崎・天の橋立旅行

昭和会
中川春郎

六月第二日曜日は昭和会恒例の親睦旅行の日です。今年の第二日曜は六月十四日、其の前日十三日より城崎天の橋立方面に一泊の予定で出掛けました。

昭和会員で欠席する人もあり、参加者は県俊昌、猪尾幹生、植田国男、大橋隆元、岸川貞夫、小寺堅生、庄清、樽岡敬祐、塚田清一、恒藤周一、中川治衛門、中川春郎、広本正利、藤井慧乗、三浦昭平、安井克典、山国喜丈、以上十七名の諸氏で、各々、自家用車に分乗、城崎の旅館西村屋をめざして進みました。

途中、生野を過ぎた所で国道の東側にあるおかきの店、播磨屋本舗に寄り黄な紛のついた餅を食べ、コーヒーを飲んで一服、此の店は御承知の如く草葺きの屋根や水車を廻して米をついて、昔風をセールスポイントにしている店です。

竹田城を左手の山の上に眺め、やがて、城崎に入り、城崎情緒豊かな大谿川に沿った柳の並木の道を通って、西村屋に入りました。

西村屋は流石に名のきこえた旅館だけあって、しっとりとした、落ちついた佇まいの五棟からなる数寄屋造りの建物が、それぞれ渡り廊下で結ばれて、中庭を囲んで建っています。各々、部屋に分かれて旅装を解き、大理石の大浴場に入り、旅の疲れを癒して宴会となりました。

宴会は、なかなかの盛会、カラオケの競演、それぞれに自慢の喉を聞かせてもらいました。

宴会終了後、城崎の町を浴衣がけでぶらつき、温泉せんべいや、麦藁細工の土産物を買って翌日は峰山を通って天の橋立に向いました。次は短歌にて。

大いなる牛画きたる看板に特産但馬牛と麗々しく書く

峰山の町を通りて天の橋立へ合歓の街路樹続く道行く

天の橋立知恵の文珠の古柱に千社札を張りめぐらせり

文珠堂裏に廻れば岸辺より成相山が彼方にかすむ

舞鶴の波止場の近く列をつくる中古車は皆ロシアに行くらし

今昔にみる謡

謡曲同好会
伊野操治

ついこの間、結婚式に招かれその式場で、司会者である若い方に、次は謡を、と告げると、「うたい」って何い？と聞き返す言葉に戸惑いました。今の若い方には能楽、謡曲といったものには全く関心がなく無関係な存在とさえなっているようです。私達の若い頃は青年団の仲間入りの年令ともなれば謡の稽古に通う方も随分多かったものでした。親から男は謡を嗜むものと諭され、また、結婚式といえば自宅で挙式と共に披露宴が行われ、その中には必ず謡「高砂」の一節が謡われ、時に中世文化伝来の古式床しい名残があったものです。

時の流れと共に何時しかそういった習慣は薄れ忘れられ、新しいものが産れるそれが時代と言うものなのでしょう……

過日のこと、能楽「宝生流」で知られた加賀の国「越中」へ行くことが有り予てよりこの地方では、「天から謡が降ってくる」の伝説に好奇心をもつ私は早速謡についてその地の知人を訪ねました。当地方の伝説に「天から謡が降って来る」と聞きましたがその謂れは、と聞くと、今はそのような事は有りませんが、昔は百姓であろうと、植木屋さんであろうと仕事をしながら謡を口にする、つまり、植木屋さんが木の手入れをしながら謡をうたう、それ程昔は謡に馴染みがあったと言う事でしょう。また、この地では今でも結婚式といえば、絶対に欠せないのが謡という。驚いたことに結納が納まれば親戚、近所の者が集り、相手方の仲人をもてなし、最初に謡「四海波」で始り、終りは必ず仲人が「トリ」として千秋楽を謡う。そうでないと、事は成就しないと言う。謡に親しむ者としては実に頼もしい限り…。殊に、この辺りには随所に能舞台があり、薪能も盛んに行われると聞かされ、流石日本随一の能楽の国「加賀の伝統」と敬服しました。因に、この地方の若い方々の同好者はと聞くと、いずこも同じ、若い人には縁の薄いとのことでした。

室町中世に端を発し六百年の歴史をもつ能楽は今や世界的に認められ、諸外国において演能され、また、親しみを持つ外国青年も数多いときます。今我が国に於ては、豊かな地域づくり、村おこし、と、古きを尋ね豊かさを求めている時、この芸能文化を見直すべきではないか。

『子どもと将棋』

山崎将棋同好会
三宅宏佳

普段、子どもだけでなく、我々大人も何気なく将棋を指している場合があると思います、何気なくという表現は、不適当であるかもしれませんが、将棋は日本古来のゲームで、あくまでも日本的な文化の一つであると、ごく当然のように考えているのではないでしょうか。

ある日、私の小さな書棚に目をやると、「将棋おもしろミニ知識」という本が詰将棋や戦法等の少し難しい本の間から顔を出しているのに気づきました。その本は小学四年生ぐらいなら将棋に親しめ、楽しみながら将棋に関する知識を持つ事ができる入門書です。その本を懐かしく見ていると、〝将棋のルーツはインドである〟という目次に目が止まりました。そして、そのページを開けてみると、栞代わりに挿んでいた詰将棋の黄ばんだ切り抜き記事が出てくるではありませんか。さらに、懐かしく読んでみると〝将棋のルーツを辿っていくと、インドの「チャトランガ」というゲームに行き当たる〟と書いてありました。そのゲームは、紀元前二千年頃に誕生し、四人がサイコロを使って、遊ぶゲームだったそうです。その「チャトランガ」がシルクロードを通って、ヨーロッパ方面に伝わり、「チェス」となり、逆に東に向って中国象棋（チャンチー）、朝鮮将棋（チャンギ）、そして、日本将棋になったと書いてありました。さらに、チェスと将棋の共通点は、多くありますが、例えば、チェスで歩の位置にあるポーンという駒は、一つずつ進んだり、桂馬の位置にあるナイトは桂馬跳びが八方にできる駒になっているそうです。まもなく、二十一世紀を迎えるにあたり、政治・経済の国際化が益々進み、核軍縮・貿易の自由化等のニュースも連日のように新聞・テレビで報道されています。また、スポーツの面でも、今年の夏に開催されたオリンピック等で華やかに国際交流が行われています。しかし、文化の面では、どうでしょうか。例えば、同じイベントに起源を持つ将棋とチェスのように、お互いの相違点を尊重し合いつつ、また、共通点を伸ばし合い、親睦を深めていくといったような交流はできないものでしょうか。二十一世紀を担う子ども達に将棋の伝統を維持し、さらに国際的なゲームとして発展させてくれる事を期待して、懐かしい本を書棚に戻しました。

文化事業に積極的に参加

平成会
池田尚治

新潮会の皆々様、発足四十年おめでとうございます。戦後、物の無い時代から、現代まで、山崎の文化発展の為、尽くしてこられた事、並大低ではなかったかと思います。さて、私共「平成会」は、平成元年の二月、新潮会二世を中心に、三十代より上の広い年齢層で構成され、職業も、商店主、医者、役場の職員、宮司等、多彩な顔ぶれで、発足しました。山崎町の文化的事業を中心として、政治以外のあらゆる分野に積極的に参加し、活動する事を目的として、会員相互の親睦、及び会員の文化的意識の向上をはかるべく、邁進していく次第です。

具体的には、一、成人病についての講演（講師、山中陽一先生）　一、心肺、救急処置方法の訓練（講師、姫路循環器センター先生）　一、フレックスタイム制導入等、新しい時代への労働時間短縮問題について（講師、菅原俊治氏）　一、山崎文化協会への協力の一環とし、松井画伯、西木正明先生を招いての洋画展参加　一、郷土研究会のお話（堀口郷土研究会長）　一、エアロビックス、体験（インストラクター三名）　御津でのクルージング、　一、相続税等、税務についての勉強会（講師、姫路税務署の方々）等、実施して来ました。又、発足五周年に向けて、何か山崎に文化的に貢献出来る行事への参加等考慮中であります。何分発足して日も浅いので、まだはっきりとした方向が定っておりません。色々な事につき当たって、挑戦してみるのも、いい経験になると思うのです。広く浅く「長続きする会」をめざして頑張りたいと思います。

野の花に寄せて

山崎植物同好会会員
楢崎好江

世界でも有数の豊かな緑に恵まれている日本列島には、約五千三百種の野生種があり、このうち三十四％約千八百種が日本固有の植物である。

日本自然保護協会の調査によると、日本の野生植物種の十七％八百九十五種が、絶滅の危機にさらされているという。私の住んでいる一宮町でも、「沢山あったでぇ」と聞くオキナグサは既に姿を消し、ササユリ・ミスミソウなども、減少の一途を辿っている。

その二大原因は、(1)開発行為による自生地の破壊、(2)山野草愛好家や山野草業者の採集によると思われる。

私は一宮町や他の市町の公民館活動の一つとして、野草教室を受持っているが、「光合成」から始めるのを常としている。植物の仕組がわかれば緑の大切さは理解できる筈。人間は豊かな自然があってこそ人間らしく生きられるのだと、畏敬の念をもって、自然に接することができるようになる。

私の野草教室では「採らない」が原則で、種子や挿し木で増やして育てようをモットーにしている。例外として、自生地の生育条件が著しく悪い時は、持ち帰ることもある。その時は、(1)空を見る→日照はどの位あるか、(2)地を見る→土質はどうか、(3)まわりを見る→何株あるか・どんな環境・栽培技術はどうか等を、充分考慮した上で腰をすえて、丁寧に堀り、取り、あとは埋めもどすようにと指導している。

間違っても、山野草の自生地を案内することが、絶滅につながる愚は避けたいと思っている。

一宮町にはカタクリの大群落がある。カタカゴの名で多くの歌人に愛され詠まれてきたこの花は、現代も好む人が多く、放っておけば加速度的に減少することは目に見えている。私は関係者に保護を訴え続けて四年目になるが、最初は「なんや、野の草花のことですかいな」と軽くあしらわれていたが、緑の保護が地球規模の重大課題となってきたのを背景に、やっと保護へ向けて進展しつつあり、未来住民と花に代って、お礼をいいたい心境である。

動物や植物はそれぞれの「分」を守って生きている。英知ある人間が他の分野まで踏みこんで、滅ぼすことがあってはならない。生きとし生けるものみんなの自然、みんなの地球なのだから……。

ご存じですか？「旧山崎小学校々歌」

山崎郷土研究会
柳田弘

一昨年、小学校卒業後五十年経って初めてクラス会を開いた。級友四十七名のうち、物故者や住所不明者が多く出席者は十八名だったが、予想以上に好評で今後も隔年に続けようと約束して別れた。

その二回目の年となり、引き続き世話人を引き受けた三人で準備の会を持ち、記念品は「すごろく」にしょうとか、「名札」は今度も用意しょうとか、いろいろと出た中で校歌といくつかは私が受け持つことになった。

数日後、世話人の一人のS君が級友から手に入れた校歌を見せてもらったが、戦後改められたもので私達が在学中に歌ったものではない。

昔、講堂の背面に掛けてあった校歌を誰か覚えている人はないだろうか。

「そうだ、小学校にはあるのでは。」と、早速T君に電話をして教頭先生にも頼んでもらったが返事がない。悠長にできない私は、小学校が駄目なら写真館はどうだろうと、近くの写真館を訪ねた。

A館では記憶力抜群の西町の二人のYさんを教えてもらった。だが、その一人は特に繁忙な方なので、もう一人のYさんに尋ねたが、今一歩のところでつながらない。

B館で見せてもらった山小の八十周年記念誌に、校歌は明治四十二年に作られたという記事を見て、結局山小を訪ね、生推協でいつもお世話になるS先生、佐用から来られた校長先生のお世話で、古い沿革誌を繙くうち、旧校歌が毛筆で歴然と記録されていた。私は嬉しさの余り写しとる手が震えたのを覚えています。

いろいろとご親切を頂いた方々へのお礼に、また、今後クラス会など開かれる方のために、お知らせします。

山崎小学校々歌

作詩　大上静夫
作曲　米田先生

一、我が園にとし毎匂う桜花
永久に変わらぬ松の色
これを心に朝な夕な
誠ひとつに大君の
みことのままに励みなば
如何なることかならざらん

二、我が郷里に千代もゆるがぬ篠の丸
流れも清き揖保の川
これを鏡に朝な夕な
たわまず折れぬ勇気もて
教えのままに勤めなば
誠の人となりぬべし

日中国交正常化二十周年の思い出

山崎詩舞道連盟会長
賀尉　小川　登

十年一昔と言うのは戦前のことで、現代（一九四五年以降）は五年一世紀の速度で、文化文明が進んでいると申されています。日中友好も将に其の通りで、変革の状況、進歩のあり方は、想像を絶するものがあります。

私が初めて中国に行ったのは昭和五十一年で、日中国交正常化の直後のことでした。竹のカーテンと評されていた時代ですから、多少おっかなびっくりの気持で親善訪問の十五日間を過しました。大きな声でものを言うことも差し控えていました。宴会は毎晩のように各都市の革命委員会の主催で行われましたが、放歌高吟をする等は思いもよらぬ事でした。私は元来向う見ずな男ですから、北京革命委員会の歓迎パーティーの席上、皆の止めるのも聞かず漢詩「宍粟郡之詩」を吟じました処、大変な享けようで大拍手を頂きました。私達の案内役であった天津市革命委員会、外交部李志遠副主任は（私達の案内役は兵庫県の姉妹都市である天津が引き受けていた）是非、今回の旅行の感想を漢詩に作って送ってくれとの事でしたので、次のような詩を作って送りました。

「為親善訪問中国有感」
萬飛翔　遠訪尋　歴巡挙似遇
知音　農工発展将驚異　文化高
隆値　仰欽　観察将軍敗亡後
見聞革命就髮髮銘心毛聖華
雄治　日中交歓感激深

註＝毛聖は毛沢東、華雄は華主席を評しました。

中国の人は大変義理堅く、人情に厚いので、其の後、天津を訪れた多くの人々に、李副主任は次から次へと「小川に宜しくと」言伝をして来られました。当時は未だ緑一色の時代で、町を歩いている人間の半分以上が軍服を着ているように思いました。田舎へ行くと、村々の公民館の前には、軍事訓練用の山砲が一門ずつ置いてありました。スカートをはいている女性は、上海のサーカスの司会者唯一人を見ただけです。中国人の月給は男性六〇元（日本円九、〇〇〇円）女性四〇元（六、〇〇〇円）でした。円の交換比率は一元一五〇円でしたが、現在は五～六〇円ではないでしょうか、為替相場で見る限りでは日本の経済力は三倍になったと言うことです。（韓国等も略々同じ状況です。）

忘れられないのは当時日中友好協会の会長であった岡崎嘉平太さんが、通産大臣の河本先生に「中国に二〇億ドル借してやって欲しい」と、全日空の大阪支店の応接間で、手を合わさんばかりにして頼んでおられました。岡崎さんは「蒋介石は日本の支払うべき、戦争の損害賠償、七兆円を全額放棄したのですから」とも申しておられました。是が僅か十数年前の事なのです。天地がひっくり返ったような変革です。

踊りを楽しみ　ボランティア活動

さつき民謡グループ
西川慶子

「芸は、身を助ける。」という諺があります。わたしの芸など、芸の足元にも及びませんが、わたしなりの、つたない「芸」に助けられた思い出があります。さつき民謡グループに入会させて頂いて四年目。二十歳になったばかりの息子を、突然の事故で失った時のことです。何日も何カ月も立ち直る事が出来ませんでした。そんな時、（故）師匠、大谷政子先生が何度となく声を掛けて下さいました。「稽古している間だけでも忘れなさい。」と励まされ、又グループの方々にもお力添えを頂き、お稽古に出られるようになりました。発表会には、涙して出場出来るまでに立ち直れました。

あれから八年、その間には、一宮町のまどか園、五十波の老人ホーム、白寿園へと、毎年九月の敬老会などボランティア活動が続けられるようになり、いろんな方々とお友達にして頂きました。これも踊りの道に入れて頂いたからこそと感謝しています。

ここ二～三年前から、孫ふたりも、「おばあちゃんと一緒に踊りがしたい。」と言ってくれまして、三人で頑張っております。

この頃では、坂東流、岸本壽賀幸先生に手解きをお願い致しまして、グループも若手が増え頑張っています。体力の続く限り、頑張りたいと思っています。

山崎町の村おこしシャントコ会にも参加させて頂き、シャントコ、夜川、左衛門と、昔なつかしい盆踊りを楽しんでおります。お一人でも踊りに趣味をお持ちの方、参加をお願いします。

蒔絵教室

山崎美術協会
加藤一子

春霞会が発足致しまして廿九年の歳月が流れました。今は亡き小畑耕二、樽岡定二両先生の力強い御協力を得まして武野先生に蒔絵を教えて戴く事になりました。高級な技術で奥深く漆の工程がわかりだして、よくこんな繊細で面倒なお仕事を老先生はお引受け戴けたものと布施の御心があればこそとつくづく思います。いつ迄たっても一人歩きは出来ず、その奥儀をきわめると、いったようなことは誠におこがましいことだと思います。この教室は、全国でも珍しく現在は若先生方にお世話になっておりますがお忙しく引っぱりだこ状態です。

作品の巾も広くお茶道具、家庭用品、装身具等々で、蒔絵の入った品は高値で売ってあるものとばかり思っておりましたのに、自分で作れる素晴しい喜びを味わい、この土地、又先生方に巡り会えた運命を感謝せずにはおれません。

時代と共に女性も社会進出の方々が多くなり、お仕事、主婦業、子育てと三役こなし大変お忙しい日々をお過しのこと、とお察し致します。私は主婦業で終りましたが、息子が進学致しましたのを機に入門させて戴きました。数多くお稽古事が催されております現在、自分の趣味にあった道に入っておく事がストレス解消にもなり、又健康保持にも繋ると思います。皆さん忙しくてとても出来ないと言われる方もありますが、物や金は不平等ですが、時間だけは平等に廿四時間戴いておりますから時間も使いようで何とかなるのではないでしょうか。

高令化社会を迎えた今日お仕事にも、主婦業にも、定年があります。私は隠居の身分ですので教わった蒔絵技術を、仏事、慶事の引出物とか或は、親しい方への贈り物とかに自作を利用致しております。

私自身消えた後も手の後を残させて戴けると満足致しております。

御仏様のもとで、布施の帰依で日々送らせて戴いている身、物品を施す事は出来ませんが、体が健康であれば、身近な方々への細く長い指先の施しが出来ますよう万分の一でもお返しが出来ればと余命を祈るのみです。

心のふれあい

山崎茶華道協会
松尾豊子

私たちは、一生の間にいろいろな人にめぐり会い、様々な出会いがあります。その出会いをつきつめていくと、おいしいお茶をもって、人をもてなす。そういうお茶の心に出会います。亭主と客、いわばもてなしたり、もてなされる際の、お互いのまごころが、いちばん大切だと思います。そこで、おいしいお茶をもてなすには、やっぱり修練されたお点前、亭主が客に気持ちを伝える道具のとり合わせ、というものが大事になってくると思います。そう考えると、そこに先生と弟子とのすばらしい出会い、ふれあいができ、茶道具である美術工芸品を鑑賞する目を養うことも必要になると思います。

千利休から初まり、四百年以上の歴史をもつ茶道も、人が生活していくうえで、大切な作法や礼儀を身につけようとする人たちの心のささえとして、身近なものになっております。華道にしても、伝統的な生け方を大事にしながらも、最近は少しの花材で、しかも部屋の狭いスペースに、誰もが生けることができる、時代にマッチした生け花もうまくとり入れられています。

茶道に於いても同様で、伝統的なもの、新しいものも、ともに、社会に広げようと、けいこにはげんでいます。山崎町茶華道協会は、一年のうちに、さつき祭、文化祭と協賛茶会、そして、わずかながらも、地域社会に貢献したい気持ちから、チャリティ茶会を催し、社会福祉施設等へ寄付させていただいております。なかなか茶の湯のもつ深い精神を極めることはできませんが、私たちはお茶の本来の基礎である、お互いの出会いを大事にして、心のうちで助け合い、いたわり合う気持ちを大切にしていきたいと思っております。

平成四年 合唱連盟だより

山崎合唱連盟
藤井七代

合唱連盟の本年の主たる活動は、五月にスウェーデンのピアニスト、オットー氏とソプラノ歌手のシェルク嬢の仏前結婚式に、仏教讃歌、祝婚歌を合唱させて頂いた事であろうと思います。厳粛そのものであり、楽しい雰囲気でもありました。これは、昭和会主催の音楽会に御両人が文化会館で演奏されたのが御縁のはじまりでした。来日の上、各地で公演活動され、山崎町の一寺院に特に心を寄せられ、挙式を希まれたのは、異国趣味であるというよりは、不思議な御縁であるとしか云い様がありません。合唱連盟の他に、須賀沢地区、一宮町、安富町の方々に声をかけ合同練習をして式に臨みました。夕刻からの日新会館での披露宴には、スウェーデンより同行された弦楽トリオ、新郎のピアノ、新婦のソロ、等々あれこれと楽しい御祝の演奏を聞かせて頂きました。この町にとっても画期的な出来事と云えるのではないでしょうか。このイヴェントに参加なさった方々は良き想い出として記憶の底に止めておられる事でしょう。数カ月後の現在、オットー氏より一九九三年の夏至祭に三日間、混声合唱を招待したいというお便りが届きました。本当なのでしょうか？　夢の様なお話です。今メンバーを募集中です。第一回目の会合も予定されました。毛利さんが「宇宙には国境線はありません」とメッセージされました。音楽は国境を超えると申します。時を同じくして山崎町は、北米のスクイム市と提携を結ばれようとされています。山崎町民がスウェーデンにて日本歌曲を歌う……　人と人との不思議な出会いを大切にしたいものです。

この合唱団はそのまま余力を残し西播磨文化会館主催の西播磨音楽祭（十二月六日）に出場致しました。会場は新装の赤穂文化会館、ハーモニーホールは外観デザインも義士の町にふさわしい素晴しい建造物です。大ホールは松材の内装、木の香も新しく匂うが如き会場でした。五月の「柿落とし」はN響を初めとし超一流の出し物ばかりとか……　宍粟混声コーラスとしてその立派なステージを踏ませて頂きました。

「ハーモニー」って素晴らしいですね。大声をあげたいような心境でした。こんな立派なステージで歌えた事に「ありがとう」と御礼を申し上げたい気持で一杯です。関係の皆様お世話になりました。

尺八雑感

邦楽・邦舞・小唄研究会
石野和雄

およそ、楽器と名の付くものは数多くありますが、和楽器と洋楽器とに大別して比較すると、全部ではありませんが、洋楽器は理論的、機械的に均一に出来ていて、誰が弾いても叩いても一応は同じ音階の音が出るようになっています。細かい点を言えば何でも違いはありますが誰でも弾きさえすれば一応音は出ます。それに較べて尺八なる楽器、こんな不完全なものは無いと、私は思います。材料は天然の竹なので二つと同じものは無く、長さ一尺八寸の竹に孔を「五個」、表に四個裏に一個開けただけのものです。この種のものを普通五孔尺八と稱して、七孔九孔尺八と区別します。一般に尺八と言えば、一尺八寸の五孔尺八のことを言います。誰でも初めて尺八を手にして、一度吹いてみると、最初から音の出る人はまあ無いと言っていいでしょう。何とか音が出るようになっても正しい音律の音が出るまでには、数年かかります。同じ孔を閉じて吹いても、音階は幾通りもあるので、吹く息の入れ方強さによってどうにでも音の高さが変わります。誰がやっても同じでないだけに演奏者によって個性のある音になります。それ故に私は尺八を不完全楽器だと言い度いのです。そんな話をある時演奏会の楽屋でしていますと、丁度同室に鼓の望月太津輔師がおられて鼓の話をされ、尺八どころか鼓程不完全な楽器はありませんよと、鼓について色々と解説して下さいました。なる程と、尺八の連中も感心して聞いていました。そうしてみると日本古来の楽器の多くは、その点でよく似ているものです。不完全なるが故に自分で自分の思う音を作り出さねばならないし、だが、そのために何とも言えぬ味のある音が出せることも大きな特徴です。音を求めてあくなき欲望を燃し続け、振り返ってみると、いつの間にか四十五年も経っていました。当世は辛抱して芸能の修行をする人も少なくなり、すぐ結果を求める者が多く、そのため、後継者が中々育ちません。安易な道を選ぶ人が多い世の中となり日本古来の伝統が失われるのではないかと憂慮しています。何とか山崎町に邦楽の灯を消さないようにと、念願する次第です。

同好の有志をお待ちします。

囲碁のすばらしさを次の世代にも

山崎囲碁同好会　松本　明

毎年、郡内の各地区で幾つかの碁会が開催されています。山崎町に於ても、今は亡き元山崎同好会会長であった前野四郎氏の、山崎囲碁会に尽された功績や遺徳を偲んで、前野杯争奪の個人戦及び団体戦が、郡内の同好者を集め、「宍粟郡囲碁同好会連絡協議会」の主催で、三月と九月の年二回ずつ、又守拙会、篠陽会、宍聖会等、各々の会も、毎月のように行われて仲々盛んであります。一方、山崎囲碁同好会でも、山崎町の催しのさつき祭りと、文化の日に協賛して、各々「さつき碁会」、「菊花碁会」と永年に亘り、年二回は必ず催されていて、郡の内外から、一般の同好者の多くを迎えてきました。

しかし近年、世話人の大変な努力にも拘らず、参加者がめっきりへってきつつある様に思えます。

高令の方々が出にくくなったり、亡くなられたりと云うことと、加えて若者の愛好者がほとんど増えないことによるものでしょう。

昔と違って、今の世の子供達には、ルールそのものが複雑で、楽しめるまでが、一朝一夕に行かない囲碁と違って、テレビやファミコン等のように、すぐに夢中になれるものが身近に色々とありその上勉強も忙しい。又若者にはゴルフ、マージャン、カラオケ、果てはパチンコ等いろいろあって、余程のことがないと碁には興味を持ってもらえないものらしい。

十年余りも前に、関西棋院宍粟支部支部長の高野圭介氏を中心に、二十名ばかりの講師陣を擁して、子供囲碁教室を開設し、四、五十名の生徒を対象に、そのご父兄の強力なる支援体制のもと、指導に乗り出したことがあります。時には講師陣の勉強にと、新宮町の西播磨文化会館まで出かけて、その道の大先輩である、南和昭氏の指導を受けたりもしたものです。

今では、二人の有段者を含む、数人の存続者を残し、あとはほとんど姿を消してしまいました。

今となっては、この子供囲碁教室で、少しでも碁に接したことで、次の機会に再び碁に親んでくれる者が幾人かでも出てくれたらと、願うばかりです。

幾年か前に、NHKのテレビ番組で独ての、インタビューに答えて、離れている息子からの、来るようにとの呼びかけにも、「自分には、囲碁があるので、友人も多くあり、毎日が楽しくて仕方がないから、碁が打てる間は行く気がしない。」と云った、やりとりを見て、碁と云うものが、いかに、年をとるまで楽しめるものであるか、と強烈な印象を受けたことがある。

現在、囲碁の普及はめざましく、世界中の国々で、磨かれ、楽しまれています。世界囲碁選手権大会なるものも毎年開かれ、国際交流も仲々盛んになっています。

碁の愛好者が、外国旅行をした時、各国で、碁会所やクラブ等で、言葉が通じなくても、飛び入りで、手談を交した話も数々聞いています。

これらのように、初めはなじみにくくとも、一旦身につけば世界にも飛躍することも夢でなく、打っている間は何事も忘れて没頭出来るので、ストレス解消にもなり、生涯楽しむことが出来る。

この囲碁のすばらしさを、もっと多くの人達に知ってもらって、是非共今からでも、参加を試みてほしいのです。

そしてこの楽しさを身につけた、その上で、次の世代にも、広く、深く、浸透させてもらいたいものと、念願するものであります。

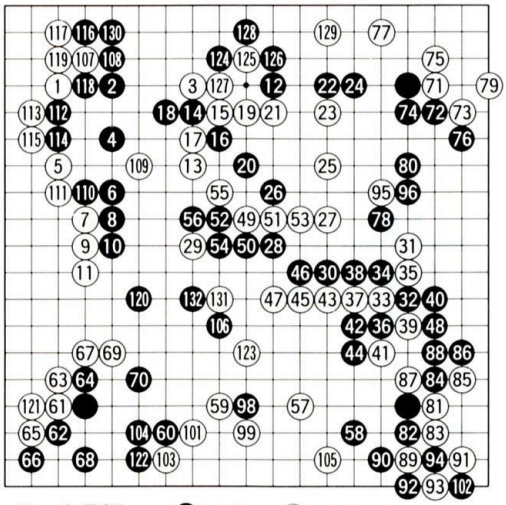
平成４年11月27日

＊お好対局＊

於：敲玉

手合割：三子

白　田嶋靖三　　黒　松本　明



白　1目勝　　100 コウトル　97 コウトル

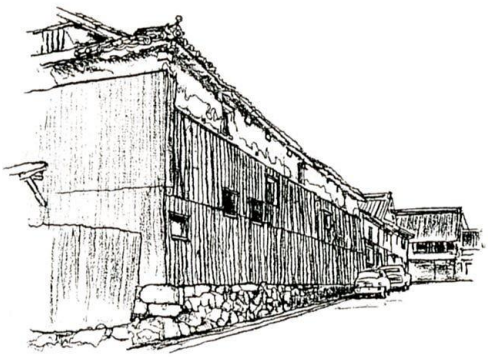
★事務局便り★

事務局長　長川耕一

。一月十八日、宍粟郡文化協会の連絡会を開催。昨年からお願いしておりました、各町の伝統「無形民俗文化財」調査が、まとまりましたので、近々紹介させていただきます。

。各町の教育委員会、文化協会の、ご協力により、「宍粟郡ふれあい文化交流会」が始動。これを機会に巾広い交流と、調査、研究を重ね、文化の向上、発展を願うものであります。

皆さま方のいろんなご意見、ご要望をお聞かせいただきたいと存じます。



編集後記

編集長　荒木俊介

いつの年も、そうですが、「やまさき文化」の編集に入る頃が丁度、師走の季節だけに一層、一年のめぐり来る早さに驚かされます。

今回も、文化協会所属の各文化団体に寄稿をお願いしておりましたところ、早くより、エッセー、或は、お便りなどお寄せ頂き、その内容の質の高さによって、機関誌をより、充実させて頂いていることに対し、衷心より厚く御礼申し上げます。創作面では、浅田先生の力作「刑屍剖観」を、コラム欄には郷土出身の清水、松岡両先生の玉稿を掲載しました。夫々の専門の道の奥深い興味あるお話をご熟読下さい。又、今回は、昨年十二月一日、山崎町に於いて催されました「西播磨ふれあい文化交流会」についての西播文化会館、松本氏の特別寄稿で誌面を飾らせて頂きました。この会が益々発展して行くことを念願して、やみません。

表紙、挿絵などでは、前回につづいて、柳田氏にお世話になり、氏の斬新で意欲的な筆致は、大方の好評を博しています。益々のご活躍を期待致しております。

OA機器・事務用品・スチール家具
学校設備品・理化学機器・楽器
イトーオフィスサービス株式会社
(旧社名　伊藤文具)
代表取締役　伊藤　勉
山崎町中央商店街　TEL(0790)62−0126

創業明治28年・さつき本舗
四季の菓子
御進物・おみやげ・お茶うけに、四季折々の
真心こめた手づくりの御菓子を
御菓子司あらき
本　店：播州山崎町さつき通り　(電)62−0170
山田店：播州山崎町山田　(電)62−0160

飛石機械産業からのお願い

人が人として幸せになれる処方箋は何なのか、そのようなことを考え「幸福の泉」を生活信条に、自作自演で30数年を歩いて参りました。昭和46年、会社発足時に経営理念と改め、お客様のご信頼にお答えする為に、人としての使命感に燃え、それを無限のエネルギーとして全社揚げて取組んでおります。

当社では、企業は社会の公器でなければと申し上げており、流通の世界の中で生活文化の向上を願い、多目的に活躍しておりますので、尚一層のご支援をお願い申し上げます。

TOBIISHI

飛石機械産業株式会社
TOBIISHI KIKAI SANGYO CO.,LTD.
for happy day happy life

飛石建機 dept. ☎(0790)62-1700
飛石建材 dept. ☎(0790)62-1700
飛石レンタリース山崎 ☎(0790)62-1703
トビイシ住設 dept. ☎(0790)62-3610
飛石レンタリース姫路 ☎(0791)63-4022
CREATIVE dept.
飛石レンタリース姫路 ☎(0792)32-5411

✦最新型カラー現像機導入✦
カラープリント・スピード仕上げ
良い品を・安く・安心して買える店

Specialty Camera Shop
コエエカメラ
宍粟郡山崎町東鹿沢26-3 ☎ 62-2089

料理旅館・割烹

創業
文久元年 菊水

兵庫県宍粟郡山崎町山崎287
TEL (0790) 62-1119(代)

幸せへの旅立ちに――。

ふじむら貸衣裳

宍粟郡山崎町山崎181 TEL (0790) 62-0052

地元にひろがる
心のふれあい ―― にしん

西兵庫信用金庫

理事長　菅　原　柾　夫

清酒 山陽盃

ふるさとのお酒　確かな品質

本醸造 しぼりたて 龍神

純米酒 きつき 一献

サンヨウハイ

山陽盃酒造　TEL (0790) 62－1010(代)

しぼりたて 原酒

登録商標 老松 スエヒロ オイマツ

キリンビール 特約店

本醸造

兵庫県山崎町　老松酒造有限会社

＊安全で快適な生活をお届けする＊

共同石油株式会社特約店

株式會社 本條商店

社長　本條　衛

本社　兵庫県宍粟郡山崎町中井96　TEL (0790) 62－4321(代)